



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

# ファカルティ・ディベロップメント 報 告 書 2022

2023 年 3 月

F D 部会

## はじめに

今年度は、コロナの感染拡大が始まって 3 年目の年となった。授業は、対面が原則となり、コロナの感染拡大を理由とした全面的な遠隔対応も行われなかった。他方で、授業の運営上、教室の定員の半分しか座席が用意できないなどの制約は残ったために、大人数の講義ではまだ影響が残っていたと言えるだろう。また、学外研修等においても、部分的には制約が残っていた。それでも、キャンパスを元気に歩く学生の姿が多く見られることは、大変喜ばしいことであった。

講義の形態は対面が原則となったが、コロナ禍で導入された様々なツールがうまく利用されるようになってきた。ZOOM 等の遠隔講義システムは受講機会の拡大にも繋がっているであろうし、Google Classroom などの LMS は、対面の講義であっても出欠管理や課題の管理にうまく利用されるようになったと感じている。DX 化が強く叫ばれているが、こういったツールは、使われている中で、より良い利用法が見つけられていくのであろう。

今年度の FD 活動における授業評価アンケートも、紙ベースではなく Google Forms を利用した WEB スタイルであった。相変わらず紙ベースの時よりも回収率が低いなど、課題は残っているが、それでも定着したと言っても良いだろう。他方、授業評価アンケートでは捉えられない、(仮に勉学に限ったとしても) 学生の活動へのモチベーションをどのように捉えるかという課題は、今後もずっと続いていくだろう。ここしばらくはコロナのこともあって、授業評価アンケートが中心であったが、それ以外の活動(授業公開、講演会その他)を模索していくことが求められるだろう。実際、看護福祉学部や学術教養センターでは数々の FD 講演会を開催しており、教員間での意見交換も活発に行われた。

今後は、IR 活動と結びつけた新しい学生の教育支援に繋がる道筋が探られることを期待したい。

最後に、本部会の運営にご尽力いただいたメンバーの皆さん、また授業評価アンケートの企画・運営や本報告書の整理・編集、会議の準備にご尽力いただいた教育推進課の高橋主任に深く感謝するとともにここに記しておきたい。

2023 年 3 月

2022 年度教育研究委員会 FD 部会 FD 部会長 廣瀬弘毅

# 目 次

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| はじめに-----                              | i  |
| 1. 活動概要-----                           | 1  |
| 1. 1 委員の構成-----                        | 1  |
| 1. 2 事業の実施状況-----                      | 1  |
| 1. 2. 1 授業評価-----                      | 1  |
| 1. 2. 2 授業公開-----                      | 13 |
| 1. 2. 3 F D 研修-----                    | 13 |
| 1. 2. 4 実施要項-----                      | 13 |
| 2. 各部局のF D活動                           |    |
| 2. 1 経済学部                              |    |
| 2. 1. 1 授業評価-----                      | 15 |
| 2. 1. 2 授業公開-----                      | 16 |
| 2. 1. 3 学科懇談会における遠隔授業導入の評価についての議論----- | 18 |
| 2. 1. 4 授業改善の取り組みと今後の課題-----           | 21 |
| 2. 2 生物資源学部                            |    |
| 2. 2. 1 授業評価-----                      | 23 |
| 2. 2. 2 授業公開の方針と実績-----                | 24 |
| 2. 2. 3 授業改善活動についての課題と展望-----          | 25 |
| 2. 3 海洋生物資源学部                          |    |
| 2. 3. 1 授業評価アンケート-----                 | 27 |
| 2. 3. 2 授業公開-----                      | 28 |
| 2. 3. 3 授業改善についての課題と展望-----            | 29 |
| 2. 4 看護福祉学部                            |    |
| 2. 4. 1 授業評価-----                      | 30 |
| 2. 4. 2 F D 研修-----                    | 31 |
| 2. 4. 3 授業改善への取り組みと今後の課題と展望-----       | 35 |
| 2. 5 学術教養センター                          |    |
| 2. 5. 1 授業評価アンケートの結果-----              | 38 |
| 2. 5. 2 授業公開の方針と実績-----                | 39 |
| 2. 5. 3 F D 研修-----                    | 40 |
| 2. 5. 4 授業改善の取組みと今後の展望-----            | 41 |

## 1. 活動概要

### 1.1 委員の構成

2022 年度の F D 部会メンバーは、以下の 6 名の教員である。

2022 年度 F D 部会委員名簿

| 氏 名     | 所 属      | 職     | 役 割   |
|---------|----------|-------|-------|
| 廣 瀬 弘 毅 | 経済学部     | 教 授   | 委 員 長 |
| 金 花     | 経済学部     | 准 教 授 | 委 員   |
| 深 尾 武 司 | 生物資源学部   | 教 授   | 委 員   |
| 田 中 祐 希 | 海洋生物資源学部 | 准 教 授 | 委 員   |
| 坂 口 昌 宏 | 看護福祉学部   | 准 教 授 | 委 員   |
| 山 川 修   | 学術教養センター | 教 授   | 委 員   |

### 1.2 事業の実施状況

#### 1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より掲載する。

## 令和4年度 学生による授業評価の実施結果

（前期）実施期間 令和4年7月4日（月）～7月28日（木）

### 調査票対象・回答状況

| <学部>     | 回答数   | 対象数    | <大学院>     | 回答数 | 対象数 |
|----------|-------|--------|-----------|-----|-----|
| 経済学部     | 1,123 | 4,124  | 経済・経営学研究科 | 5   | 13  |
| 生物資源学部   | 249   | 849    | 生物資源学研究科  | 30  | 80  |
| 海洋生物資源学部 | 388   | 1,174  | 看護福祉学研究科  | 2   | 15  |
| 看護福祉学部   | 647   | 1,888  |           |     |     |
| 学術教養センター | 2,044 | 4,140  |           |     |     |
| キャリアセンター | 0     | 0      |           |     |     |
| 計        | 4,451 | 12,175 | 計         | 37  | 108 |

### 参加教員

| <学部>      | 実施人数  | 実施率     | <大学院>     | 実施人数 | 実施率     |
|-----------|-------|---------|-----------|------|---------|
| 経済学部      | 25 人  | 96.2 %  | 経済・経営学研究科 | 0 人  | 0.0 %   |
| 生物資源学部    | 16 人  | 94.1 %  | 生物資源学研究科  | 5 人  | 71.4 %  |
| 海洋生物資源学部  | 11 人  | 100.0 % | 看護福祉学研究科  | 1 人  | 50.0 %  |
| 看護福祉学部    | 26 人  | 92.9 %  | キャリアセンター他 | 2 人  | 100.0 % |
| 学術教養センター  | 23 人  | 100.0 % | 非常勤講師     | 0 人  | 0.0 %   |
| キャリアセンター他 | 0 人   | 0.0 %   |           |      |         |
| 非常勤講師     | 9 人   | 64.3 %  |           |      |         |
| 計         | 110 人 | 92.4 %  | 計         | 8 人  | 66.7 %  |

### 参加科目

| <学部>     | 実施科目   | 実施率    | <大学院>     | 実施科目 | 実施率    |
|----------|--------|--------|-----------|------|--------|
| 経済学部     | 42 科目  | 89.4 % | 経済・経営学研究科 | 1 科目 | 50.0 % |
| 生物資源学部   | 19 科目  | 90.5 % | 生物資源学研究科  | 6 科目 | 75.0 % |
| 海洋生物資源学部 | 23 科目  | 92.0 % | 看護福祉学研究科  | 1 科目 | 50.0 % |
| 看護福祉学部   | 41 科目  | 83.7 % |           |      |        |
| 学術教養センター | 88 科目  | 93.6 % |           |      |        |
| キャリア教育科目 | 0 科目   | 0.0 %  |           |      |        |
| 計        | 213 科目 | 90.3 % | 計         | 8 科目 | 66.7 % |

## 令和4年度 学生による授業評価の実施結果

(後期) 実施期間 令和4年12月13日 (火) ～1月31日 (火) (ただし授業の都合等により一部期間外実施)

### 調査票対象・回答状況

| <学部>     | 回答数   | 対象数    | <大学院>     | 回答数 | 対象数 |
|----------|-------|--------|-----------|-----|-----|
| 経済学部     | 840   | 3,910  | 経済・経営学研究科 | 0   | 0   |
| 生物資源学部   | 190   | 795    | 生物資源学研究科  | 5   | 28  |
| 海洋生物資源学部 | 229   | 637    | 看護福祉学研究科  | 0   | 0   |
| 看護福祉学部   | 393   | 1,520  |           |     |     |
| 学術教養センター | 1,312 | 4,051  |           |     |     |
| キャリアセンター | 0     | 0      |           |     |     |
| 計        | 2,964 | 10,913 | 計         | 5   | 28  |

### 参加教員

| <学部>      | 実施人数  | 実施率    | <大学院>     | 実施人数 | 実施率    |
|-----------|-------|--------|-----------|------|--------|
| 経済学部      | 26 人  | 92.9 % | 経済・経営学研究科 | 0 人  | 0.0 %  |
| 生物資源学部    | 19 人  | 90.5 % | 生物資源学研究科  | 1 人  | 25.0 % |
| 海洋生物資源学部  | 7 人   | 70.0 % | 看護福祉学研究科  | 0 人  | 0.0 %  |
| 看護福祉学部    | 22 人  | 88.0 % | キャリアセンター他 | 0 人  | 0.0 %  |
| 学術教養センター  | 23 人  | 95.8 % | 非常勤講師     | 0 人  | 0.0 %  |
| キャリアセンター他 | 0 人   | 0.0 %  |           |      |        |
| 非常勤講師     | 4 人   | 50.0 % |           |      |        |
| 計         | 101 人 | 87.1 % | 計         | 1 人  | 25.0 % |

### 参加科目

| <学部>     | 実施科目   | 実施率    | <大学院>     | 実施科目 | 実施率    |
|----------|--------|--------|-----------|------|--------|
| 経済学部     | 81 科目  | 83.5 % | 経済・経営学研究科 | 0 科目 | 0.0 %  |
| 生物資源学部   | 22 科目  | 84.6 % | 生物資源学研究科  | 1 科目 | 25.0 % |
| 海洋生物資源学部 | 15 科目  | 83.3 % | 看護福祉学研究科  | 0 科目 | 0.0 %  |
| 看護福祉学部   | 30 科目  | 81.1 % |           |      |        |
| 学術教養センター | 73 科目  | 93.6 % |           |      |        |
| キャリア教育科目 | 0 科目   | 0.0 %  |           |      |        |
| 計        | 221 科目 | 86.3 % | 計         | 1 科目 | 25.0 % |

# 福井県立大学 授業に関する調査

本アンケートは以下の講義用です。アンケートに回答する前に確認してください：

学部名サンプル・講義名サンプル1・教員名サンプル

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を御覧ください。

回答を1回に制限するためgmailアドレスでログインしてもらっていますが、誰が記入したのかは分からない設定になっています。教員にはアカウントは通知されませんので、このアンケートの回答が成績に影響することはありません。

[Google にログイン](#)すると作業内容を保存できます。 [詳細](#)

次へ

フォームをクリア

# 福井県立大学 授業に関する調査

[Google にログイン](#)すると作業内容を保存できます。 [詳細](#)

\*必須

## 授業に関する調査アンケート項目

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育をより良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックし、Q6については自由に記述してください。

Q1 この講義（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組みましたか？ \*

- ☐ 1 意欲的に取り組まなかった
- ☐ 2 あまり意欲的に取り組まなかった
- ☐ 3 ある程度意欲的に取り組んだ
- ☐ 4 意欲的に取り組んだ

Q2 この授業についての方法（先生の講義の方法、話し方、資料の提示方法、学習支援システム・遠隔システムの活用など）はどうでしたか？ \*

- ☐ 1 不適切である
- ☐ 2 やや不適切である
- ☐ 3 まあまあ適切である
- ☐ 4 非常に適切である

Q3 この授業の内容はどの程度理解できましたか？ \*

- ☐ 1 理解できなかった
- ☐ 2 あまり理解できなかった
- ☐ 3 ある程度理解できた
- ☐ 4 理解できた



Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか？ \*

- ☐ 1 高まらなかった
- ☐ 2 あまり高まらなかった
- ☐ 3 少し高まった
- ☐ 4 高まった

Q5 この授業を総合的に評価してください \*

- ☐ 1 良くない
- ☐ 2 あまり良くない
- ☐ 3 まずまず良い
- ☐ 4 良い

Q6 この授業について、その方法、教材、授業内容など、良かった点・悪かった点・気づいた点を自由にご書いてください（この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します）。

回答を入力

Q7 教員設定の質問・選択式（該当授業のみ）

- ☐ 1
- ☐ 2
- ☐ 3
- ☐ 4

Q8 教員設定の質問・記述式（該当授業のみ）

回答を入力

遠隔授業に関する調査アンケート項目

この科目を、完全に（または主に）遠隔で授業を受けた学生にお尋ねします。  
あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号にチェックしてください。

遠隔で授業を受けなかった方は回答不要になります。そのまま次へ進んでください。

Q9 遠隔で行われた授業について、遠隔システムの活用（資料の提示方法、フィードバックのあり方等）はどうでしたか？

- ☐ 1 うまく活用されていない。
- ☐ 2 あまりうまく活用されていない。
- ☐ 3 まずまずうまく活用されている。
- ☐ 4 うまく活用されている。

Q10 遠隔で行われた授業について、学習の効果はありましたか？

- ☐ 1 効果がなかった。
- ☐ 2 あまり効果がなかった。
- ☐ 3 ある程度効果があった。
- ☐ 4 効果があった。

戻る

送信

フォームをクリア

## 全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。  
以下に、集計結果の見方を記す。

|                 |                                                                                                                                                                                                               |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 集計数             | 前期：回答された全てのアンケート<br>後期：回答された全てのアンケート                                                                                                                                                                          |
| Q1 から Q5/Q9、Q10 | アンケートの Q1 から Q5 並びに Q9、Q10 に対応                                                                                                                                                                                |
| 数値上段            | 平均値（質問は、4 件法）                                                                                                                                                                                                 |
| 数値下段            | 母標準偏差                                                                                                                                                                                                         |
| 集計方法            | 上段 回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1 点、2 点、3 点、4 点」と得点化。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を示す。<br>下段 設問ごとに母標準偏差を求め、回答者の選択肢に対する偏り度合いを数値で下段に示す。但し、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。<br>「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。 |
| 〔集計グループ〕        |                                                                                                                                                                                                               |
| 全体              | 全ての集計対象者                                                                                                                                                                                                      |
| 部局別             | 当該学部には所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計                                                                                                                                                                                |
| 履修登録者数別         | 履修登録者数が「100 人以上」「100 人未満」別に集計                                                                                                                                                                                 |

令和4年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

| 集計グループ       | ( 集計数 )  | Q1意欲的受講 | Q2授業方法 | Q3内容理解 | Q4関心 | Q5総合評価 | Q9遠隔システム活用 | Q10遠隔授業の効果 |
|--------------|----------|---------|--------|--------|------|--------|------------|------------|
| 全体           | ( 4451 ) | 3.41    | 3.45   | 3.23   | 3.28 | 3.50   | 3.42       | 3.30       |
|              |          | 0.66    | 0.64   | 0.66   | 0.72 | 0.63   | 0.73       | 0.73       |
| 部局別 ( 4451 ) |          |         |        |        |      |        |            |            |
| 経済学部         | ( 1123 ) | 3.40    | 3.38   | 3.14   | 3.18 | 3.39   | 3.38       | 3.24       |
|              |          | 0.68    | 0.68   | 0.68   | 0.74 | 0.68   | 0.77       | 0.75       |
| 生物資源学部       | ( 249 )  | 3.35    | 3.36   | 3.16   | 3.30 | 3.50   | 3.26       | 3.10       |
|              |          | 0.68    | 0.67   | 0.70   | 0.72 | 0.66   | 0.70       | 0.73       |
| 海洋生物資源学部     | ( 388 )  | 3.35    | 3.31   | 3.11   | 3.15 | 3.37   | 3.31       | 3.23       |
|              |          | 0.63    | 0.69   | 0.76   | 0.75 | 0.73   | 0.75       | 0.78       |
| 看護福祉学部       | ( 647 )  | 3.47    | 3.49   | 3.17   | 3.42 | 3.56   | 3.59       | 3.40       |
|              |          | 0.61    | 0.59   | 0.59   | 0.65 | 0.57   | 0.59       | 0.67       |
| 学術教養センター     | ( 2044 ) | 3.43    | 3.51   | 3.33   | 3.31 | 3.56   | 3.45       | 3.37       |
|              |          | 0.67    | 0.61   | 0.63   | 0.71 | 0.59   | 0.73       | 0.71       |
| 規模別 ( 4451 ) |          |         |        |        |      |        |            |            |
| 100人以上       | ( 1500 ) | 3.38    | 3.38   | 3.15   | 3.19 | 3.40   | 3.35       | 3.24       |
|              |          | 0.66    | 0.68   | 0.68   | 0.75 | 0.66   | 0.80       | 0.76       |
| 100人未満       | ( 2951 ) | 3.43    | 3.48   | 3.27   | 3.32 | 3.55   | 3.46       | 3.34       |
|              |          | 0.66    | 0.61   | 0.65   | 0.70 | 0.61   | 0.68       | 0.71       |

令和4年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

| 集計グループ     | ( 集計数 ) | Q1意欲的受講 | Q2授業方法 | Q3内容理解 | Q4関心 | Q5総合評価 | Q9遠隔システム活用 | Q10遠隔授業の効果 |
|------------|---------|---------|--------|--------|------|--------|------------|------------|
| 全体         | ( 37 )  | 3.38    | 3.51   | 3.16   | 3.49 | 3.62   | 3.47       | 3.52       |
|            |         | 0.75    | 0.50   | 0.37   | 0.55 | 0.48   | 0.71       | 0.56       |
| 部局別 ( 37 ) |         |         |        |        |      |        |            |            |
| 経済・経営学研究科  | ( 5 )   | 3.40    | 3.80   | 3.20   | 4.00 | 4.00   | 3.80       | 3.80       |
|            |         | 1.20    | 0.40   | 0.40   | 0.00 | 0.00   | 0.40       | 0.40       |
| 生物資源学研究科   | ( 30 )  | 3.37    | 3.47   | 3.17   | 3.40 | 3.57   | 3.36       | 3.44       |
|            |         | 0.66    | 0.50   | 0.37   | 0.55 | 0.50   | 0.74       | 0.57       |
| 看護福祉学研究科   | ( 2 )   | 3.50    | 3.50   | 3.00   | 3.50 | 3.50   | 4.00       | 4.00       |
|            |         | 0.50    | 0.50   | 0.00   | 0.50 | 0.50   | 0.00       | 0.00       |

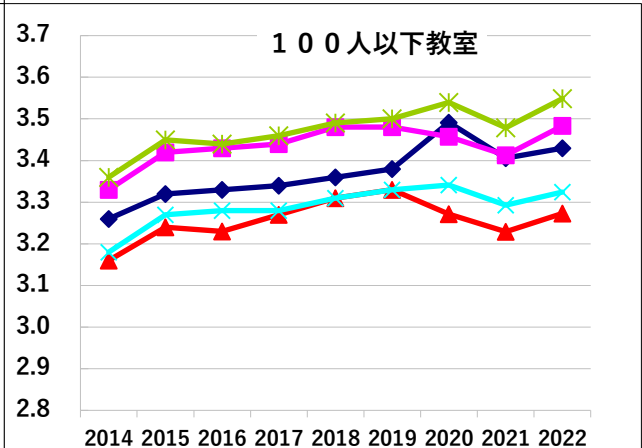
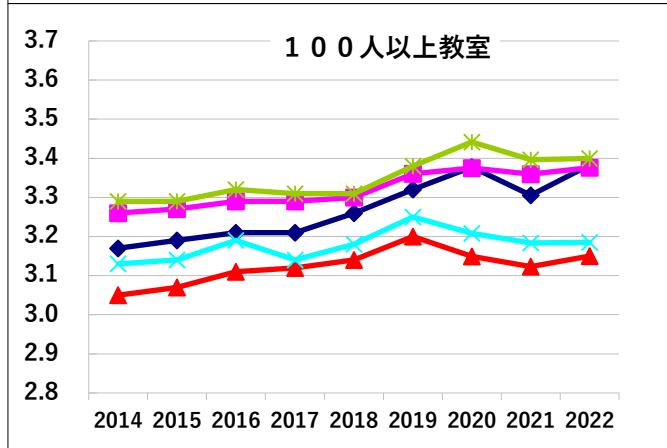
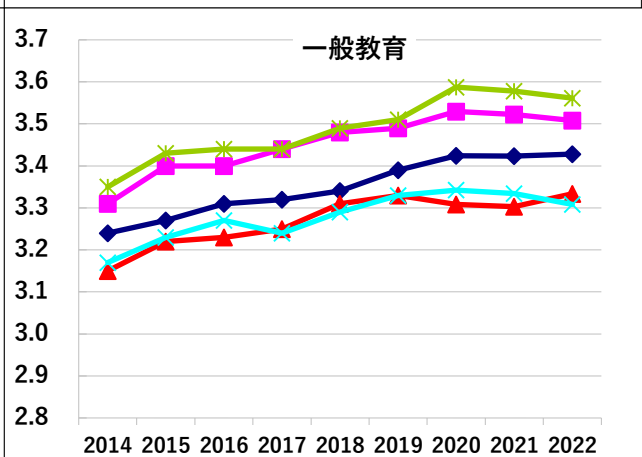
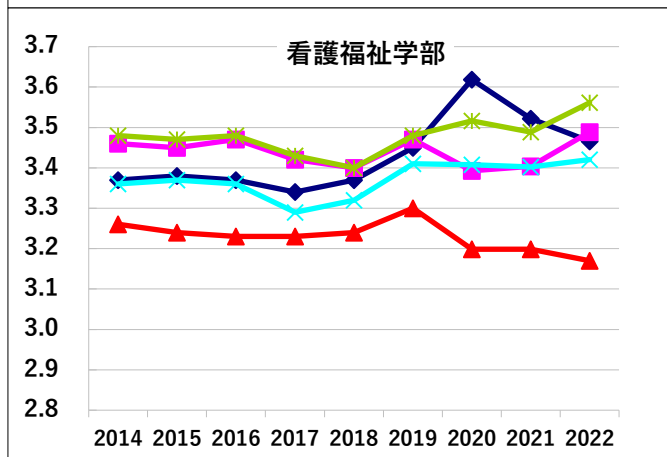
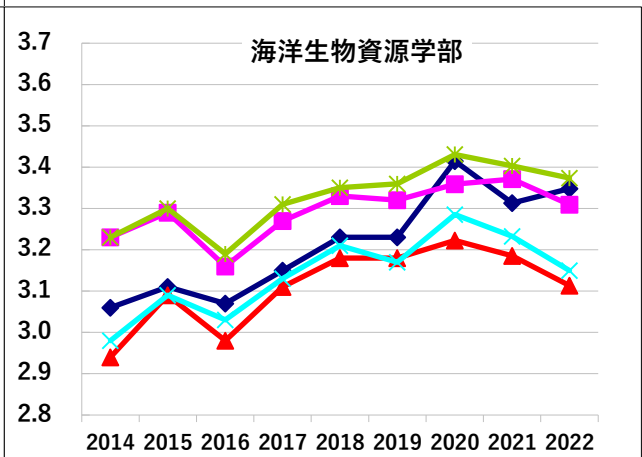
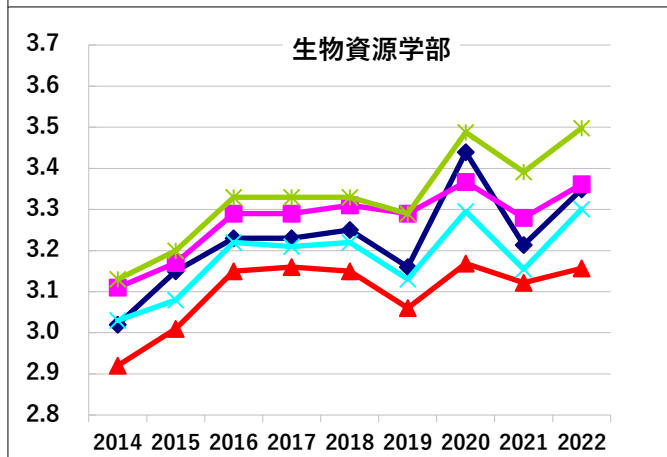
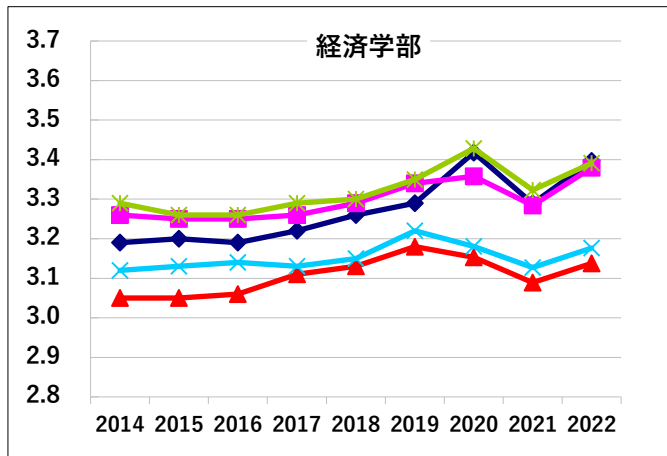
令和4年度 後期 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

| 集計グループ       | ( 集計数 )  | Q1意欲的受講      | Q2授業方法       | Q3内容理解       | Q4関心         | Q5総合評価       | Q9遠隔システム活用   | Q10遠隔授業の効果   |
|--------------|----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 全体           | ( 2964 ) | 3.45<br>0.68 | 3.52<br>0.61 | 3.31<br>0.63 | 3.38<br>0.69 | 3.59<br>0.59 | 3.52<br>0.71 | 3.44<br>0.69 |
| 部局別 ( 2964 ) |          |              |              |              |              |              |              |              |
| 経済学部         | ( 840 )  | 3.48<br>0.67 | 3.51<br>0.60 | 3.30<br>0.61 | 3.36<br>0.70 | 3.56<br>0.60 | 3.52<br>0.66 | 3.41<br>0.65 |
| 生物資源学部       | ( 190 )  | 3.29<br>0.81 | 3.39<br>0.66 | 3.16<br>0.62 | 3.39<br>0.72 | 3.49<br>0.64 | 3.35<br>0.89 | 3.21<br>0.76 |
| 海洋生物資源学部     | ( 229 )  | 3.40<br>0.65 | 3.36<br>0.76 | 3.14<br>0.77 | 3.24<br>0.77 | 3.45<br>0.77 | 3.33<br>0.88 | 3.33<br>0.82 |
| 看護福祉学部       | ( 393 )  | 3.56<br>0.59 | 3.54<br>0.56 | 3.33<br>0.55 | 3.50<br>0.60 | 3.63<br>0.53 | 3.49<br>0.70 | 3.46<br>0.69 |
| 学術教養センター     | ( 1312 ) | 3.43<br>0.69 | 3.56<br>0.59 | 3.35<br>0.62 | 3.38<br>0.68 | 3.64<br>0.55 | 3.61<br>0.65 | 3.51<br>0.67 |
| 規模別 ( 2964 ) |          |              |              |              |              |              |              |              |
| 100人以上       | ( 786 )  | 3.39<br>0.69 | 3.52<br>0.61 | 3.27<br>0.61 | 3.29<br>0.70 | 3.56<br>0.60 | 3.61<br>0.64 | 3.49<br>0.65 |
| 100人未満       | ( 2178 ) | 3.47<br>0.67 | 3.52<br>0.61 | 3.32<br>0.63 | 3.41<br>0.68 | 3.60<br>0.59 | 3.48<br>0.73 | 3.42<br>0.71 |

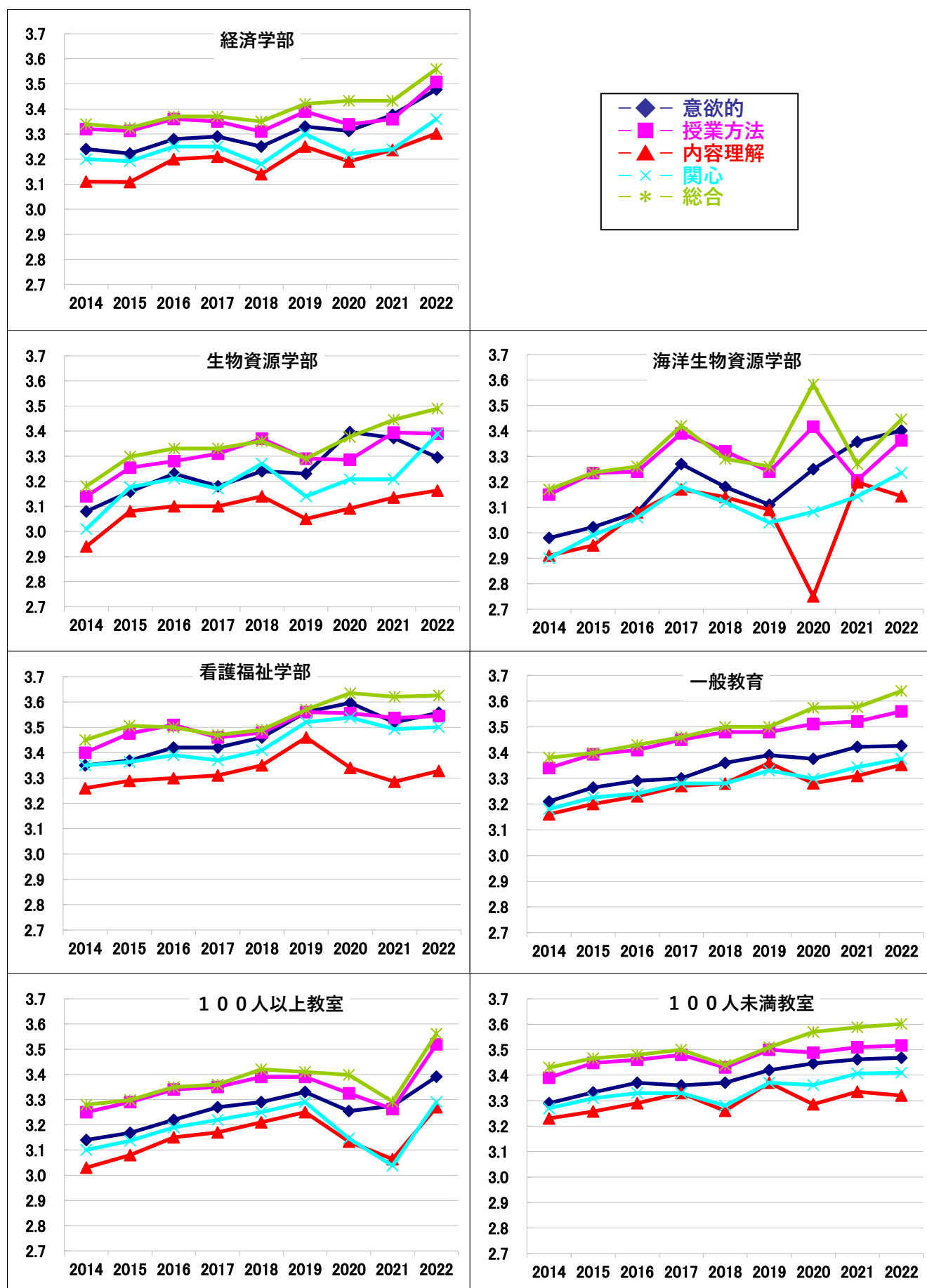
令和4年度 後期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

| 集計グループ    | ( 集計数 ) | Q1意欲的受講      | Q2授業方法       | Q3内容理解       | Q4関心         | Q5総合評価       | Q9遠隔システム活用   | Q10遠隔授業の効果   |
|-----------|---------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 全体        | ( 5 )   | 3.20<br>0.40 | 3.20<br>0.40 | 3.00<br>0.00 | 3.20<br>0.40 | 3.60<br>0.49 | 3.60<br>0.49 | 3.20<br>0.40 |
| 部局別 ( 5 ) |         |              |              |              |              |              |              |              |
| 経済・経営学研究科 | ( 0 )   | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       |
| 生物資源学研究科  | ( 5 )   | 3.20<br>0.40 | 3.20<br>0.40 | 3.00<br>0.00 | 3.20<br>0.40 | 3.60<br>0.49 | 3.60<br>0.49 | 3.20<br>0.40 |
| 看護福祉学研究科  | ( 0 )   | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       | －<br>－       |

## 重要項目の経年特性（前期）



## 重要項目の経年特性（後期）



### 1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部署のFD活動」にて報告する。

### 1.2.3 FD研修

全体研修は令和4年度は実施せず。各部署で行った研修は、2章「各部署のFD活動」にて報告する。

### 1.2.4 実施要項

#### 福井県立大学学生による授業評価実施要項

- 1 目 的  
学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。
- 2 対象教員  
専任教員および非常勤講師
- 3 対象学生  
学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生
- 4 対象授業  
(1) から (3) を除く授業科目  
ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。  
(1) オムニバス授業  
(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科  
(3) 実施期間終了後の集中講義
- 5 期 間  
前期科目： 前期 期末試験期間前の2週間  
後期科目、通年科目： 後期 期末試験期間前の2週間  
集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。
- 6 方 法  
アンケート用紙にて実施する。  
ただし、事前の申請により、LMSにて実施することができる。
- 7 項 目  
評価は、下記項目について実施する。  
(1) から (5) については、4段階評価とし、(6) については、自由記述とする。  
ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。  
(1) 受講の意欲  
(2) 授業方法  
(3) 内容の理解  
(4) 関心  
(5) 総合評価  
(6) 感想等



## 8 評価結果の取扱い

評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびLMS実施データとともに部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。

評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。

## 9 評価結果の公開

- (1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内LAN内のウェブページにて公開する。

ただし、7（6）感想等の記載内容については、公開しない。

評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。

- (2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内LAN内のウェブページにて公開する。

### 【 附 則 】

平成26年 4月 1日 施行

平成27年 5月26日 改正（期間）

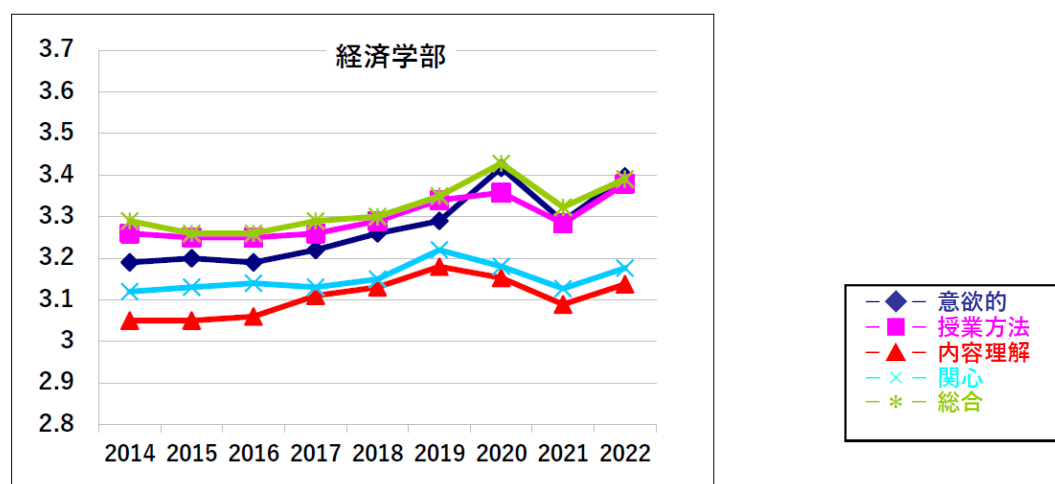
平成29年 6月 7日 改正（評価結果の取扱い）

## 2.1 経済学部（廣瀬弘毅、金花）

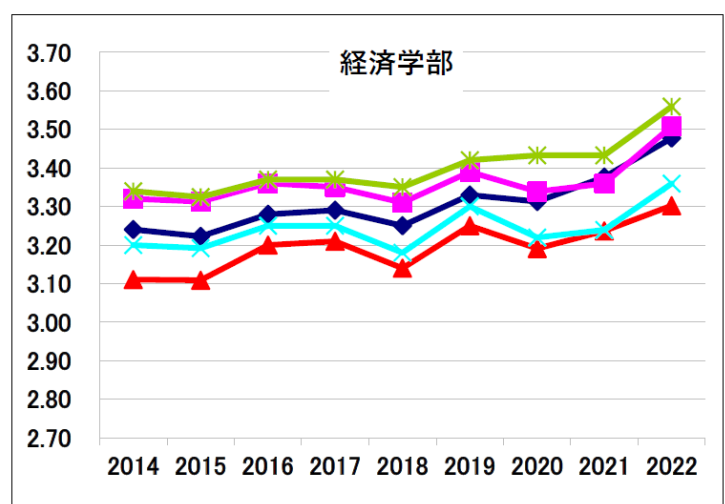
### 2.1.1 授業評価

経済学部における授業評価結果は、2022 年度に入り原則対面授業の数も増え、全体的にコロナ前の水準に改善している。コロナ禍で初めて遠隔授業が実施された 2020 年度以降、授業評価の低下が見られたが、2022 年度にはその改善が進んでいることが分かる。

<前期>



<後期>



具体的に、学部の授業評価結果は、前年度に比べてすべての項目において評価が高くなっている。そのうち前年度と比べて、2022 年度前期に、「意欲的受講」が 0.11 ポイント、「授業方法」が 0.10 ポイント上がり、後期に、「意欲的受講」が 0.10 ポイント、「授業方法」が 0.15 ポイント、「関心」が 0.12 ポイント上がっている。

令和4年度 学生による授業評価全体集計結果(学部生)

| 経済学部 | 集計数  | Q1 意欲的受講       | Q2 授業方法        | Q3 内容理解        | Q4 関心          | Q5 総合評価        | Q9 遠隔システム活用 | Q10 遠隔授業の効果 |
|------|------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-------------|
| 前期   | 1123 | 3.40<br>(0.11) | 3.38<br>(0.10) | 3.14<br>(0.05) | 3.18<br>(0.05) | 3.39<br>(0.07) | 3.38<br>—   | 3.24<br>—   |
| 後期   | 840  | 3.48<br>(0.10) | 3.51<br>(0.15) | 3.30<br>(0.06) | 3.36<br>(0.12) | 3.56<br>(0.13) | 3.52<br>—   | 3.41<br>—   |

( ) の内は、昨年度との差 (=今年度-昨年度) を示している。

大学院の授業評価結果は下記の表の通りである。授業評価アンケートの実施原則により、後期は実施されなかったもので、ここでは前期の結果のみ掲載している。経済・経営学研究所の授業評価結果は、全学の平均を上回っており、全体的に前年並みか、前年度を少し上回っている。

令和4年度 前期 学生による授業評価全体集計結果(大学院生)

| 集計グループ    | 集計数 | Q1 意欲的受講        | Q2 授業方法        | Q3 内容理解        | Q4 関心          | Q5 総合評価        | Q9 遠隔システム活用 | Q10 遠隔授業の効果 |
|-----------|-----|-----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-------------|
| 全体        | 37  | 3.38<br>(-0.13) | 3.51<br>(0.06) | 3.16<br>(0.09) | 3.49<br>(0.22) | 3.62<br>(0.14) | 3.47<br>—   | 3.52<br>—   |
| 経済・経営学研究所 | 5   | 3.40<br>(-0.34) | 3.80<br>(0.06) | 3.20<br>(0.15) | 4.00<br>(0.42) | 4.00<br>(0.37) | 3.80<br>—   | 3.80<br>—   |

( ) の内は、昨年度との差 (=今年度-昨年度) を示している。

(注：後期は授業評価アンケートの実施原則により実施されなかった。)

### 2.1.2 授業公開

経済学部では、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得るための機会を提供することを目的として、授業公開を実施してきた。今年度の授業公開は、下記3つの授業で実施された。

授業公開が行われた後、「授業公開調査票」を通じて、担当教員と他の教員との意見交換などが行われ、担当教員から質問・コメント等に回答があった。

<前期>

担当教員：木野龍太郎 教授

科 目 名：生産管理論Ⅰ

日 時：2022年7月25日（月）2限

教 室：共通講義棟 L108 教室

備 考：ゲストスピーカーによる講義。対面で実施。

【意見交換の内容】

質問①：スライドを印刷して配付してはどうですか。

担当教員の回答：配付となると企業のデータも入っていますので社内承認なども必要になり面倒だったので、今回は投影のみといたしました。

質問②：ゲスト講師を確保するための工夫などがありますか？

担当教員の回答：数年前から最終講義をゲスト講義としています。事前にシラバスや講義内容をお送りしたうえで、その内容を踏まえてお話して頂いております。基本的には毎回違うゲストをお願いしております。講師依頼は実はそれほど困っていません。卒業生がお世話になっている会社や知り合いの会社で採用に前向きなところにお願ひすると学生にアピール出来るということで快諾されます。有り難いことに学生も熱心に受講してくれますし、エントリーが増えたり入社してくれたりという事例もありゲスト講師や会社の方も喜んでくださいます。

<後期>

担当教員：廣瀬弘毅 教授

科 目 名：産業組織論

日 時：2022年12月23日（金）5限

備 考：実務家による特別講義。大雪のため大学の方針により対面から遠隔に変更して実施。

※急遽、遠隔に切り替わったこともあり、意見交換等は実施できなかった。

担当教員：廣瀬弘毅 教授

科 目 名：演習Ⅱ

日 時：2023年2月8日（水）

教 室：共通講義棟 L111 教室

備 考：卒業論文報告会の後の時間を使つての発表。

学生自身に、経済学そのものを説明する報告をさせた。卒業論文も書き上げ、卒業を控え

た経済学部が、4年間学んできた学問をどのように捉えていたかを再確認する作業として、ここ何年か演習Ⅱで取り組んできている。ただ、「経済学とは〇〇のような学問です」というまとめ方だと、ただのレポートのようになってしまうので、あえて「高校生に向けて経済学を説明したどうなるか」という設定で考えてもらっている。これを、パワーポイントの形で発表をしてもらった。

ただ、会議が長引いたため、担当者自身（廣瀬）が時間に遅れてしまい、趣旨の説明なしで学生が報告する羽目になってしまい、参観した教員に誤解を与えてしまったように思う。つまり、「高校生への説明」が単なる仕掛けに過ぎず、本旨は「学生自らが経済学をどのように理解したか」を発表することで、これまで4年間の経済学教育が問われる「教員自身に対する試験」である。そのため、最初の枠組み以降は、あえて学生自身に任せて報告を組み立てさせている。

#### 【意見交換の内容】

- ・高校生には響かない
- ・高校生には、難し過ぎるかも
- ・もっと実際の身近な経験に振った方が良くも

この他、授業公開に参加する教員が少ないとの意見が出ており、この点は今後のFD活動における検討課題の一つである。

### 2.1.3 学科懇談会における遠隔授業導入の評価についての議論

経済学部では、学部全員或いは学科に分かれて、定期的に懇談会を開催し、学部や学科の課題全般について議論している。今年度は、下記の日程で、両学科共同で学科会議が開催された。

会議では、まず松岡孝恭准教授から「経済学部における遠隔授業導入の評価」について報告が行われ、その後、報告内容を踏まえて、教学改善に向けて教員全体の議論があった。ここでは、まず松岡准教授の報告内容の概要を記述し、その後全体の議論の中で出たコメントの内容を紹介する。

日時：2023年1月18日13:30～14:45（報告＋全体の議論）

開催場所：経済学部棟10F教授会室

報告者：松岡孝恭 准教授

報告タイトル：「経済学部における遠隔授業導入の評価-教学データと2020年度前期のアンケート調査から-」

## 1. 報告の概要

### ① 目的

本稿の目的は、遠隔授業の実施によって経済学部生の学業成績にどのような変化があったか調べることである。この目的のために経済学部生に配布する成績通知書の元データを利用して分析を行う。また、2020 年度前期に経済学部では教員に対して遠隔授業に関するアンケート調査を実施した。授業形態や出席確認の仕方、課題の出し方や成績評価などを調査した回答は、学生が大学に来ないという異例な状況に各教員がどう対処したかに関する記録となっている。本稿では、この調査結果を教学データと組み合わせることで、遠隔授業の実施形態や評価方法の違いで素点の分布がどう変化したかについて調べる。

### ② データ

本稿で分析に利用するデータは2つある。一つは教学データであり、ここでは学生の成績通知書の元データを利用する。もう一つは2020 年に経済学部で実施した遠隔授業に関するアンケート調査の回答データである。

### ③ 分析結果について

(前略) 2020 年度前期の素点や成績の分布には、著しい変化が見られる。履修登録科目数の総数に大きな変化はなかったものの、一般・専門合わせた成績別の科目の割合から、2020 年度前期に「不可」と「可」の割合が減り、「優」の割合が増えたことがわかる。経済学部で実施したアンケート調査を利用した分析では、講義形態別の違いで素点の分布が変わるとは言えず、出席確認と評価方法の違いによって素点の平均や四分位が変わる結果となった。科目別に分布の経年変化を調べると、2020 年度前期の分布が他の年度の分布と異なっている科目が比較的多く存在している。

2020 年度前期だけ特殊な結果となった背景として、遠隔授業の形態の違いではなく、むしろ出席確認や課題の出し方、期末試験の実施の仕方などが特殊であったという理由が考えられる。2020 年度前期は学生が大学に来ることなく、自宅やアパートで授業を受けるという特殊な状況だった。開始後の4 月の1 か月間は休講で、授業は5 月の1 週目からであった。授業スケジュールはタイトであり、土曜日と祝日も授業日に設定された。そして、期末試験が遠隔で実施されたこともこの学期に特殊な状況となっている。

2020 年度前期に実施された遠隔授業で本質的なことは、学生が大学に来ない状況で学生の学業への取り組みを評価せざるを得なかった点ではなかろうか。コロナ以前に通常行われていた「中間・期末テスト」のみを行うと答えた科目で素点の平均点や中央値が低くなったことは、出席確認のための「毎回のテスト・課題」が素点の分布をシフトさせた可能性がある。また、受講者全員が同一の場所で同一の時間に試験監督者の立会いの下で行えないという状況では、正味の学業の評価を困難にさせた可能性もある。

#### ④ 教学データの取り扱いについて

成績通知書の元データは、統計的に処理できるように加工するまでかなりのプロセスが必要であった。成績データや入試データ、さらにはFD授業評価アンケートなどの結果を統一的に扱おうとすると、現状では困難な状況にある。教学データは大学教育を改善していくために役立つ貴重な情報源であり、今後も教学データを活用した分析や情報提供が増えることは望ましいと考える。そのためには、デジタル推進への取り組みと足並みを揃えながら、データ利活用に伴う負担を軽減していくことが必要であろう。

## 2. 全体の議論

共同学科会議では、松岡准教授からの報告を踏まえて、遠隔授業と大学のデータ利用などについて、様々な意見交換が行われた。主なコメントは下記の通りである。

### <遠隔授業について>

- ・ 遠隔授業において成績が高いのは、遠隔を組み合わせることによって、学生の理解度が高まっているのか？理解度が高まっていないのに、成績だけ上がっている可能性はある。
- ・ いつもは対面テストだったが、2020年度教員側が自信をもって「不可」をつける情報が足りず、あまめにつけてしまった可能性がある。
- ・ 遠隔授業における成績評価について、平常点と理解度を上げるために、教員がどう対応すべきなのかは、まだ議論の余地がある。
- ・ 遠隔ならではのメリットもある。例えば、Zoomを併用して録画して、グーグルクラスルームにアップロードしたら、後で何回も見れるので、遠隔のメリットが得られるのではないのか。例えば、怪我などで入院している学生もビデオを見て取り戻せる。
- ・ 過去のデータも含めて、今後も分析を続けて、遠隔のいいところをどう使うかが大事である。
- ・ 2020年の学生がまだ在学しているので、その後の変化も見たい。

### <大学の教学データ利用について>

- ・ 成績通知書の元データを統計的に処理できるように加工するまでかなりプロセスが必要であった。
- ・ データについて、使いやすいデータをどう整備していくのが課題である。
- ・ 大学のデータが使いにくく、声をあげてもらいたい。

以上、遠隔授業については、そのメリットを今後授業にどのように活かせるかが重要なポイントとなる。また、教学データの利用については、今後教育・研究活動に活かせるデータの構築が課題となる。

#### 2.1.4 授業改善の取り組みと今後の課題

授業改善に向けての取り組みについては、「経営学総論Ⅱ」の講義内容を見直し、オムニバス講義形式とすることが経営学科長から提案された。これについて学会会議での議論を経て教授会で承認され、次年度から実施されることになった。

##### ① 内容

- ・ 次年度からの「経営学総論Ⅱ」の担当交替することに伴い、講義内容を見直して、経営学科教員によるオムニバス講義形式とする。
- ・ 1 セメスター・15 コマの講義を、経営学科の教員がそれぞれ1 コマ担当する。

##### ② オムニバス講義形式とする理由

- ・ この科目は、経営学科1年生の受講者が多いことから、経営学科の教員の多くが講義を担当することで、学生が教員の顔などを覚えることにつながり、ゼミ選択などの際に役立てられると考える。
- ・ 同じく、経営学科において実施している専門教育の全体像を掴むことになり、4年間の学生生活における履修計画を立てやすくすることにつながると考える。

##### ③ 実施体制

- ・ それぞれの講義は、各専門科目の導入的な内容とする。
- ・ 毎回の講義で最後に小テストなどを実施し、それを平常点評価とする。
- ・ 期末試験は実施せず、各教員の評価点を総括担当が取りまとめて最終成績とする。
- ・ 学術教養センターの必修科目と重複しないように時間割を設定する。
- ・ 統括担当は、年度ごとに経営学科教員の持ち回りで進める
- ・ 2023 年度については試行的に実施し、その結果を踏まえて次年度以降も継続するかどうかを再検討する。
- ・ 試行的実施のため、現行カリキュラムに影響が出にくい形で進める。

##### ④ 今後の課題

2024 年度以降の継続課題について、会議において下記のような意見が出された。

- ・ 現行「経営学総論Ⅰ（1 年生前期配当・必修科目）」と、今回の（新）「経営学総論Ⅱ」の内容は、逆のほうが良いのではないか。入学後の早いうちに経営学科の教員と学生との接点を持つことで、2 年生向けの「基礎ゼミ」の選択などにおける参考に出るため、オムニバス講義を先に持って行って、科目名もそれぞれ変更したほうが良いと思う。
- ・ 科目名を「経営学総論Ⅱ」が適切ではないように思う。



「経営学総論Ⅱ」については、2023 年度オムニバス講義形式の実施結果を踏まえながら、引き続き改善を重ねていく必要がある。

## 2.2 生物資源学部（深尾武司）

### 2.2.1 授業評価

学部の授業評価結果は、前後期ともほとんどの項目で昨年とほぼ同様の結果であったが、「関心」については、前後期とも昨年度より上昇していた。また、総合評価では、前期で昨年度よりも上昇していた。

近年 10 年間に於いて、生物資源学部の授業評価は、どの評価項目においても、一般教育、経済学部、看護福祉学部の授業評価より低い傾向にある。これにより、生物資源学部のスコアは、毎年、全学部平均より低い。今年度も、生物資源学部の授業評価は、多くの項目において全体平均より低い結果となった。しかし、「関心」と「総合評価」の項目では全体平均とほぼ同じ評価であり、例年と異なる結果であった。

令和 4 年度 学生による授業評価全体集計結果（学部生）

|    |      | 集計数  | Q1 意欲           | Q2 授業方法        | Q3 内容理解        | Q4 関心          | Q5 総合評価         |
|----|------|------|-----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|
| 前期 | 全体   | 4451 | 3.41<br>(0.04)  | 3.45<br>(0.06) | 3.23<br>(0.04) | 3.28<br>(0.02) | 3.42<br>(-0.03) |
|    | 生物資源 | 249  | 3.35<br>(0.14)  | 3.36<br>(0.08) | 3.16<br>(0.04) | 3.30<br>(0.15) | 3.50<br>(0.11)  |
| 後期 | 全体   | 2964 | 3.45<br>(0.04)  | 3.52<br>(0.08) | 3.31<br>(0.05) | 3.38<br>(0.07) | 3.59<br>(0.08)  |
|    | 生物資源 | 190  | 3.29<br>(-0.08) | 3.39<br>(0.00) | 3.16<br>(0.02) | 3.39<br>(0.18) | 3.49<br>(0.05)  |

( ) 内は、昨年度との差（今年度 - 昨年度）。

今年度の大学院の授業評価結果については、生物資源学研究科以外の研究科からの回答が非常に少なかったため、大学院全体の授業評価と生物資源学研究科の授業評価がほぼ同じ結果となった。

生物資源学研究科では、昨年度と比較して、前後期とも、「関心」と「総合評価」の項目でスコアが上昇していた。回答数が少ないため、スコアが上昇していた要因を分析することは難しいが、上昇していた項目が、学部での授業評価と一致することは興味深い。今年度と昨年度の講義内容や実施方法は、学部でも大学院でも大きな違いはないため、今年度において「関心」と「総合評価」のスコアが上昇した要因は不明である。

令和4年度 学生による授業評価全体集計結果（大学院生）

|    |      | 集計数 | Q1 意欲           | Q2 授業方法         | Q3 内容理解         | Q4 関心           | Q5 総合評価         |
|----|------|-----|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 前期 | 全体   | 37  | 3.38<br>(-0.13) | 3.51<br>(0.06)  | 3.16<br>(0.09)  | 3.49<br>(0.22)  | 3.62<br>(0.14)  |
|    | 生物資源 | 30  | 3.37<br>(-0.05) | 3.47<br>(0.14)  | 3.17<br>(0.09)  | 3.40<br>(0.25)  | 3.57<br>(0.15)  |
| 後期 | 全体   | 5   | 3.20<br>(-0.40) | 3.20<br>(-0.45) | 3.00<br>(-0.35) | 3.20<br>(-0.35) | 3.60<br>(-0.15) |
|    | 生物資源 | 5   | 3.20<br>(0.03)  | 3.20<br>(-0.13) | 3.00<br>(0.00)  | 3.20<br>(0.37)  | 3.60<br>(0.27)  |

( ) 内は、昨年度との差（今年度－昨年度）。

## 2.2.2 授業公開の方針と実績

### (1) 方針

生物資源学部では、毎年、1－2科目を授業公開の対象科目として選定し、所属教員による授業参観を実施している。公開授業の選定については、以下の項目を選定基準としている。1) 授業評価において学生から高い評価を受けた授業、2) 効果的でユニークな教育手法を取りいれている授業、3) 他大学も含め講義経験が浅い教員の授業。

公開授業の直後、担当教員と参加教員によるミーティングを実施している。ここでは、対象講義に関するフィードバックについて議論すると共に、自身の講義における工夫や効果的な教授法に関する意見交換を行い、学部全体の教育の質のレベルアップに努めている。

### (2) 実績

今年度は、長谷部助教の「応用微生物学 II」および角田准教授の「生態学 II」を公開講義に選定し、授業参観と意見交換会を実施した。

公開科目： 「応用微生物学 II」

実施日時： 2022年7月5日 2限（10：40-12：10）

場所： 共通講義室棟 L204

講義概要： プラスミドの構築とその利用について

意見交換会： 同日、12：10-13：10

場所： 生物資源学部棟 1F 会議室

参加者： 10名（教授6名、准教授2名、講師1名、助教1名）

公開科目： 「生態学 II」

実施日時： 2022年11月14日 2限（10：40-12：10）

場所： 共通講義室棟 L204

講義概要： 植生遷移について

意見交換会： 同日、12：10-13：10

場所： 生物資源学部棟 1F 会議室

参加者： 7名（教授4名、准教授1名、助教2名）

どちらの公開講義においても、参加者には、講義における強み、改善点、感想などを記入する評価シートが配布され、講義後のミーティングでは、評価シートをもとに講義に関する意見交換が行われた。また、参加者それぞれが自身の講義で実施している効果的な教授法や工夫などについても話し合われた。今年度は、永平寺キャンパスで対面講義を行いながら、あわらキャンパスへはオンラインで講義を提供する「ハイブリッド形式」を採用する教科が増えたが、ハイブリッド講義での教授法や工夫についても議論された。

### 2.2.3 授業改善活動についての課題と展望

今年度は、創造農学科（あわらキャンパス）が創設3年目を迎え、専門科目を受講する学生数が大幅に増加した。創造農学科の学生は、永平寺キャンパスで開講されている専門科目を受講することも多く、これに対応するため、今年度はハイブリッド方式の講義数が増加した。多くの教員は、オンライン講義に関してはすでに慣れ親しんでいるが、ハイブリッド方式での講義経験は比較的浅く、講義法を改善する必要性が議論された。ハイブリッド形式で最も困難な点は、対面で目の前にいる学生に向かって講義をすると、画面を通じて講義を視聴している学生への意識はうすくなり、画面を見ながら講義を実施すると、対面で講義を受けている学生への意識がうすくなる点である。本学部では、授業参観の後に意見交換会を実施し、参観対象となった授業に関してだけでなく、参加者全員で各自の講義で実施している工夫などを議論しているが、ハイブリッド形式での効果的な教授法に関しては、引き続き議論を続けていく予定である。

生物資源学部では、前期で90.5%、後期で84.6%の講義で授業評価アンケートが実施された。前期は全学平均より高い実施率であったが、後期の実施率は、全学平均より低かった。大学院においては、生物資源学研究科の実施率は、全研究科の中で最高であった。今後も、授業評価アンケートの実施時期や手法の周知を徹底し、高い実施率を維持・上昇させていきたい。

生物資源学部では、昨年度より公開講座への授業参観を再開し、直後に意見交換会を開催している。今年度は、2 科目の授業参観が実施され、どちらも生物資源学部の教員の 1/4 が出席し、講義活動に関する工夫や問題点、解決法などが活発に議論された今後もこの活動を継続し、学部全体の講義の質向上に役立てていきたい。

## 2.3 海洋生物資源学部（田中祐希）

### 2.3.1 授業評価アンケート

海洋生物資源学部における 2022 年度の授業評価アンケートの実施科目数は前期が 23、後期が 15 であった。受講者が少人数（概ね 5 人以下）の科目やオムニバス形式の科目、実験・実習・演習科目を除き、ほぼ全ての科目で実施された。また、多くの教員は、学生からの自由記述に対して具体的な改善方法を提示するなど丁寧なコメントを公表していた。

アンケート結果の経年変動を見ると（11、12 ページの全体集計結果の図のうち海洋生物資源学部のパネルを参照）、本学部の講義に対する評価は概ね緩やかな上昇傾向ないし安定傾向にあり、2022 年度にはアンケート開始以来初めて、全評価項目の平均で前期・後期ともに学部平均で 3.3 を超えた（ほぼ全ての授業がオンラインとなった 2020 年度を除く）。各教員の努力の表れと捉えられよう。一方で他学部との比較では、前期は全ての項目でほぼ全学平均と同程度であったものの、後期ではやや下回っている項目が多く（図 1）、本学部の講義にもまだ改善の余地が残されていることが示唆される。

評価値の標準偏差は、例えば総合評価の項目で前期 0.76、後期 0.77 と、全学平均よりもやや大きい傾向にあり、学生間で評価にバラつきがあることがわかる。特に、「内容理解」や「総合評価」の項目で標準偏差が大きい。内容的に高度な理系の専門科目においては、受講者各人の理解度にどうしても差が出がちであり、それが講義の総合評価にも影響を与えているものと推察される。このような傾向はある程度やむを得ない部分もあるだろうが、高い評価を与えた学生の満足度をそのままに保ちながら、残念ながら低い評価となってしまった学生の満足度を上げることができれば、全体としての評価がさらに向上するものと期待される。そのためには、講義のレベルを下げることなく、理解の不十分な学生に対して教員側からより積極的に働きかけることで、躓きの原因を取り除いていくことが求められているのかもしれない。

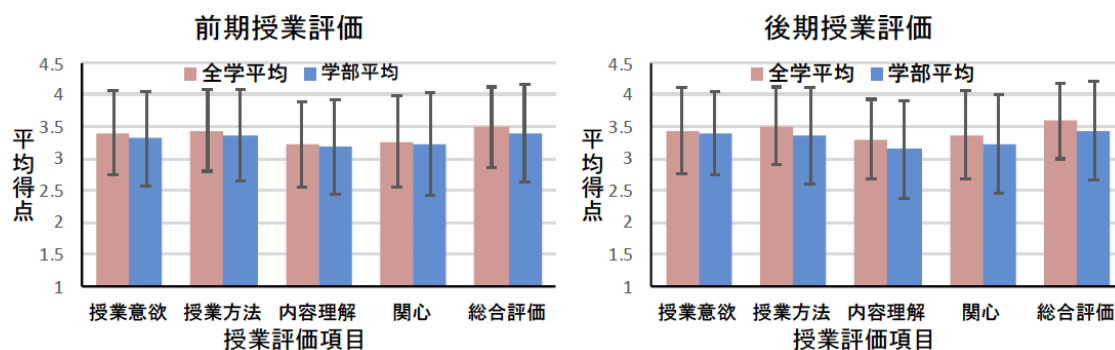


図 1: 2022 年度前期および後期の海洋生物資源学部における授業評価アンケートの結果。各項目に付されたバーは標準偏差を表す。

アンケート結果を講義科目間で（あるいは学部間や年度間で）比較する際には細心の注意が必要であることは言うまでもない。特に理系の基礎科目においては、実際に自らが研究の現場で使用することでその重要性・有用性を実感しない限り、学習する意義をなかなか見出しづらい性質の科目も数多く存在する。その意味で、アンケート結果だけが講義の評価基準ではないことには十分配慮しつつ、引き続きより効果的かつ魅力的な講義を展開できるよう学部全教員で協力して取り組んでいきたい。

## 2.3.2 授業公開

### (1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参観者と意見交換することを通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会を提供することを目的とする。授業公開は大学教育における画一的な模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障される中で、個々の授業内容に合わせたより特色のある効果的な授業を継続的に育むためのものである。そのため、授業内容について非建設的な批判を行うのではなく、講義に対する互いのスタンスを尊重しながら、特に授業方法について教員同士が学び合うことを趣旨としている。

### (2) 実績

2022年度には後期に一回の授業公開を実施した。参加教員数が本学部専任教員27名中6名とやや少なく、次年度以降はより積極的に参加を呼びかけ、授業改善の有効な場となるよう努める必要がある。

本年度の授業公開は、渡慶次力准教授が主に三年次生に対して開講している「漁業制度論」を対象として12月に開催された。本科目は日本における各種の漁業制度の特徴を学ぶことを目的としている。渡慶次准教授は宮崎県の水産試験場等における実務経験が豊富であり、現場で実感される日本の地域漁業・水産業の課題や、その解決に向けた法整備を学べる本科目は、例年、学生から高い評価を受けている。三年次生の後期対象の選択科目でありながら、30名を超える受講者数を集めていることも、その人気を表している。

渡慶次准教授の「漁業制度論」がどのようにしてスムーズな講義進行を実現しているのか、また、学生の知的欲求を満たし、主体的な学習を促すためにどのような工夫がなされているのかを知り、自らの講義へとフィードバックする機会と位置付けて授業公開を実施した。

公開科目名：漁業制度論（三年次生対象・選択科目）

担当教員：渡慶次力 准教授

公開日時：2022年12月14日（水）

・授業見学：10:40～12:10

参観教員は感想や質問などを記録

・検討会：12:10～13:00

参観教員の感想をもとに意見交換を行う

会場：小浜キャンパス 204 講義室

参加者：5名（兼田、佐藤晋、山田、吉川、田中）

講義内容の概要は以下の通りであった。

・前回の復習：

－ Google Classroom (GC)で質問を受け付け、その回答

・本日の内容：

- － 旧 TAC 法について、日本の資源管理の考え方
- － その日の内容について GC で質問を投げかける
- － 全員に回答を示す
- － 講義のパワーポイント資料は当日に公開
- － パワーポイントは空欄があって埋める形式

・小テスト：

- パワーポイントの内容をメモしていれば答えられるもの
- 1 回分を 2 点として成績に組み入れる（成績の 30/100 点）

これまで制度や法律にあまり馴染みのない理系学生でも理解できるよう丁寧な解説がなされていた。また、全体を通じて、GC を効果的に活用することで、双方向性の高い授業が展開できている印象を受けた。質問を GC で受け付けることで、学生が活発に質問できるようになることも新たな発見であった。

### 2.3.3 授業改善についての課題と展望

海洋生物資源学部における今後のFD活動方針

2023 年度には先端増養殖科学科の第一期生が二年次生となって小浜キャンパスに進学し、海洋生物資源学科・先端増養殖科学科の二学科体制による専門講義や実験・実習が本格的に始まる。新任教員も大幅に増え、より多様な専門科目が開講される予定である。この機会に、各教員の講義をより魅力的かつ効果的なものとするために、年二回程度（前期・後期に一回ずつ）、授業公開を実施したい。新任教員の方にも積極的に参加を呼びかけ、他大学での効果的なアプローチを紹介してもらうなど、在任教員との間で自由に意見交換できる機会を提供する。こうした教員間の相互作用を通じて、各教員が自らの専門性や背景を活かした特色ある講義について考える契機になればと期待している。

また、授業公開のうち少なくとも一回は前年度までの授業評価アンケートで高い評価を受けた授業を対象とすることで、授業評価アンケートのフィードバックを通じた教育の質の向上を目指す。



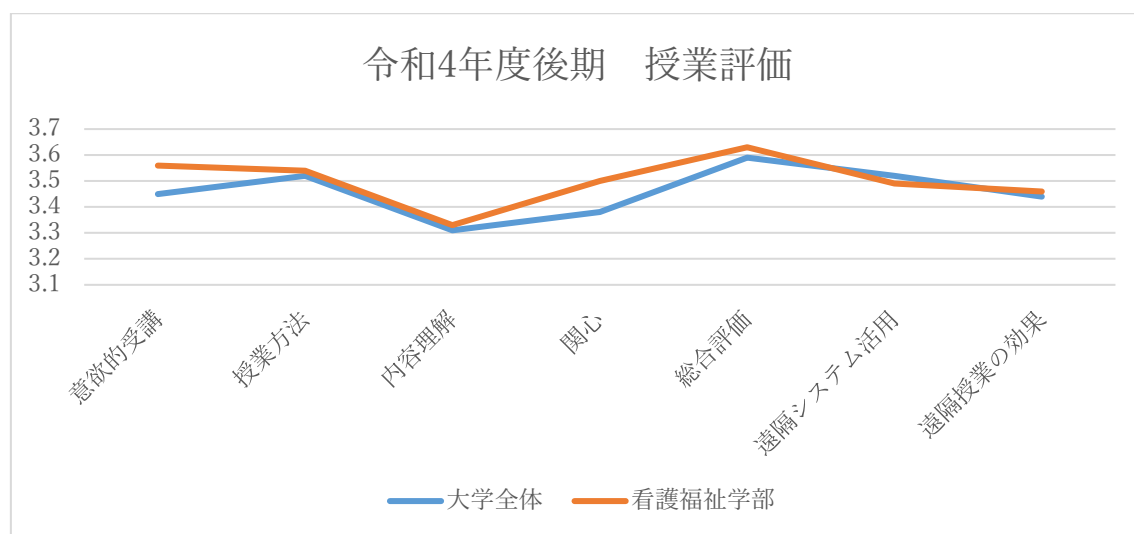
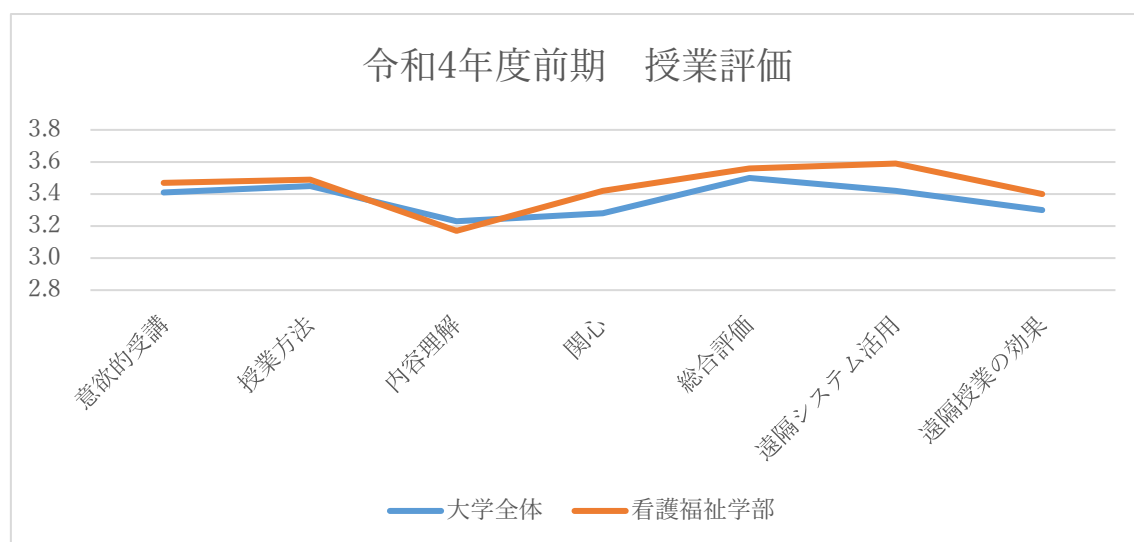
## 2.4 看護福祉学部（坂口昌宏）

今年度は、昨年度に引き続き、授業評価アンケートについては新型コロナ感染により前期・後期ともにオンラインによる質問紙調査を行った。その際に、大学として学科名を問う項目を削除することとなったため、学部全体としての結果を報告する。

これらのデータを基に授業評価（2.4.1）ならびに授業改善の取り組みと今後の課題と展望（2.4.3）を報告する。またFD研修（2.4.2）についても併せて報告する。

### 2.4.1 授業評価

2022 年度前期は、基本的には対面授業を実施し、コロナ感染状況に応じて遠隔授業に変更するなど対応してきた。後期も同様に学部生、履修生等の状況を踏まえて、遠隔授業を実施する場合もあった。下図は令和4年度の看護福祉学部と大学全体を比較した授業評価である。



看護福祉学部の前期末授業評価は「意欲的受講」、「授業方法」、「関心」、「総合評価」、「遠隔授業の効果」の項目で、大学全体の評価よりやや高い得点であった。また後期は、「意欲的受講」、「授業方法」、「内容理解」、「関心」、「総合評価」、「遠隔システム活用」、「遠隔授業の効果」で評価が高い傾向を示した。各評価項目の比較をみると、「意欲的受講」が前期は 3.47・後期は 3.56 となっており、大学全体の評価（前期 3.41、後期 3.45）よりも 0.05 以上高かった。「授業方法」については、看護福祉学部の比較では前期よりも後期が 0.05 高く、前期・後期ともに大学全体よりも高かった（前期：0.02、後期：0.04）。「内容理解」は、看護福祉学部の比較では前期より後期が 0.14 高く、前期は大学全体よりも 0.06 と低い結果になったものの、後期では 0.02 高い結果となった。「関心」の項目では、看護福祉学部の比較では前期より後期が 0.08 高く、前期・後期ともに大学全体よりも高い得点を示した（前期：0.14、後期：0.12）。「総合評価」においては、看護福祉学部の比較では前期より後期が 0.07 高く、前期・後期ともに大学全体よりも高い結果となっている（前期：0.06、後期：0.04）。

これまでの結果を踏まえると、看護福祉学部の授業評価については前期と後期では評価対象科目が異なっており、単純にその比較はできないものの、全体的に前期より後期の評価が高い傾向を示した。その背景には、学生の「意欲的受講」は前期から後期にかけて高まり、「授業方法」の改善も伴って、「内容理解」、「関心」が高まったのではないかと考えられる。また、「内容理解」の項目が他の項目に比べ低い傾向にあるが、看護福祉学部では専門職教育が中心になることから、講義の工夫や改善を行ったとしても専門的知識や技術の修得には「正しい」知識と「適切な」技術の学修が求められるため、講義内容の簡素化や演習の単純化などには限界がある。そのことから鑑みると、前期から後期にかけて内容理解の評価が上がっていることに対して、一定の評価ができるだろう。

また今年度から、遠隔授業に関する項目（遠隔システム活用、遠隔授業の効果）が追加された。これらの項目を看護福祉学部と大学全体で比較すると、遠隔システム活用では前期と後期とでは評価が逆転しており、データ分析をするには、もう少し調査データの蓄積が必要である。一方で、遠隔授業の効果では看護福祉学部が大学全体と比べ、前後期ともに若干高い結果（前期：0.1、後期 0.02）となっている。これについても、データ分析には同様のことが言える。

#### 2.4.2 FD 研修

今年度、FD 研修については以下のような取組みを実施した。

[第 51 回全国社会福祉教育セミナー]

日時：(1 日目) 2022 年 11 月 12 日 (土) 10:00～16:10

(2 日目) 13 日 (日) 10:00～15:30

※Zoom によるオンラインでの開催

## 【1日目】

### ●基調講演『病気の子どもを育てる家族の現状と私たちにできること』と対談

講師：光原ゆき氏（特定非営利活動法人キープ・ママ・スマイリング 理事長）

対談：光原ゆき氏、空閑浩人氏（同志社大学・ソ教連 常務理事）

昨年度セミナーテーマともなっていた「無関心への関心（見えないのではなく見てないのではないか）」として、医療的ケア児の親という当事者家族という立場で子どもの入院に伴う付き添い者支援を2013年より始めた光原氏の体験と支援活動の展開について講演であった。

講演後の空閑氏との対談では、「負があることを解決したい」という光原氏の思いから始まった活動が、市場の原理を取り組み、多くは母親である付き添い者向けに配付する院内での生活に役立つ商品を詰めた「付き添い支援パック」に自社商品を提供してもらうことで、社会貢献したい企業のブランドイメージアップや、企業側が廃棄に費用がかかる商品を支援につなげるという好循環の関係を築いてきたこと、そして、それはソーシャルワーク領域での「社会資源の開発」であるが、専門職でない光原氏が展開してきた原動力について語られた。

最後に、付き添い者対象の調査でもソーシャルワーカーを知らない人が多いため、いい社会資源として認知度を高める必要があるとの光原氏の意見が述べられた。

### ●行政説明『社会福祉士及び精神保健福祉士等をめぐる政策動向について』

道念由紀氏（厚生労働省 社会・援護局 総務課 地域福祉課 地域共生社会推進室併任 社会福祉専門官）

今村仁美氏（厚生労働省 社会・援護局 精神・障害保健課 心の健康支援室（併任）精神・障害保健課 主査）

羽野嘉朗氏（厚生労働省 子ども家庭局 家庭福祉課 虐待防止対策推進室 室長）

①社会福祉士を巡る政策動向に関して～地域共生社会の実現を推進するソーシャルワーク専門職としての養成・育成への期待～ 厚労省社会・援護局総務課、地域福祉課地域共生社会推進室「地域共生社会の実現」に貢献し得る社会福祉士養成教育課程の改正、包括的支援体制、重層的支援体制整備事業の担い手として実践能力を有するソーシャルワーカーの養成、養成カリキュラムの内容の充実、実習教育の充実、新カリに伴う社会福祉士国家試験の変更

②精神保健福祉士をめぐる精神保健医療福祉行政の動向～厚労省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課、精神科医療の現状、精神保健福祉士の現状、養成、教育内容の見直し、国家試験、地域志向の精神保健医療福祉体制に向けた検討、精神保健福祉法等の改正

③子ども家庭福祉の実務者の専門性の向上について～厚労省子ども家庭局家庭福祉課虐待防止対策推進室

児童福祉法改正に伴う子ども家庭福祉の実務者の専門性の向上。新たな認定資格（子ど

も家庭福祉ソーシャルワーカー（仮称）の検討

についてそれぞれ説明があった。

●分科会 1 『新カリキュラムのソーシャルワーク実習に向けた準備のポイント—課題を乗り越える方法を共に模索する—』

コーディネーター：高良麻子氏（法政大学・ソ教連 理事）

話題提供者：畑亮輔氏（北星学園大学）、菊地悟氏・三浦真美氏（社福）愛敬園 障がい福祉サービス事業所 北隣館）、小山泰明氏（社福）立川市社会福祉協議会）

【北星学園大学：畑氏】

3年生夏期休暇 180 時間は旧カリと変わらず、新たに 11 月に 60 時間の実習を実施する。2 年生前期から 3 年生の後期までの新カリ実習プログラムを実施する上での配慮事項、実習機関への調整における新たな会議の設置等について、北星学園大学の取り組みについて共有された。

【社会福祉法人愛敬園：菊池氏、三浦氏】

新カリ実習の受け入れ実習機関としての取り組みと現時点での不安等について話があった。

【社会福祉法人立川市社会福祉協議会：小山氏】

愛敬園と同様に新カリ実習の受け入れ実習機関としての取り組みと現時点での不安等について話があった。

詳細については、社会福祉学科のソーシャルワーク実習会議にて共有したい。

【2 日目】については、分科会 2～5 に参加しているが、そのなかでも、分科会 4・分科会 5 の内容を紹介する。

●分科会 4 『ソーシャルワーク教育における ICT の可能性—平時における教育への効果的な活用を考える—』

コーディネーター：坂本毅啓氏（北九州市立大学）

話題提供者：中根成寿氏（京都府立大学）、清水良太氏（富士フィルムシステムサービス（株））

まず、中根氏より「記録システム Kintone」を使用した実習情報の管理業務について報告があった。2020 年以前に遠方での実習が始まったことを機に、実習先情報（実習施設所在地、実習指導者登録状況など）、配属学生情報（実習期間、巡回日など）を従来の Excel データ管理する方法から Kintone を使用した情報管理、学生が作成する実習記録をオンラインでチェックする方法などの ICT 化を進めた実例であり、新カリキュラムでの 2 カ所実習となることによるマネジメントコストの軽減とペーパーレス化が実現している内容であった。

次に、国内 88 校の薬学部で採用されている「実務実習システム」の社会福祉士版 FBSS について発行元の清水氏より紹介があった。LMS や GC のようなオンラインシステムで、実習記録の作成、実習評価などについて教員、学生、学外の実習指導者という 3 者でのオン

ライン上でのやりとりが可能となる。その後のグループでは、2名の通学制公立大学教員と1名の通信制大学教員との情報交換を行った。すでに公立大2校では次年度よりFBSS導入予定とのことであった。

最後に、オンラインでの巡回指導が認められれば、これらのICT活用により、全国の生まれ育った地域または現代版セツルメント（住み込み型実習）も可能となるというような展望について話題提供者より総括された。

●分科会 5『ソーシャルワーク教育における合理的配慮—実習をめぐる現状と課題を共有する—』

コーディネーター：藏野ともみ氏（大妻女子大学・ソ教連 会長補佐）

話題提供者：村田淳氏（京都大学 学生総合支援機構 准教授 障害学生支援部門チーフコーディネーター、高等教育アクセシビリティプラットフォーム・ディレクター）、森山拓也氏（城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科准教授、精神保健福祉士実習担当）

この分科会での内容は、①合理的配慮とは何かを基本をあらためて考える、②実習指導、教育に従事した「事例」と「悩み」から考える、③参加者の「悩み」を共有するというものであった。

まず、村田准教授の講義は、「高等教育における合理的配慮（reasonable accommodation）とは何か」というテーマであった。

主な内容として、個人をとりまく社会的障壁の除去、軽減を図るアプローチは個人の支援、サポート、ケア、サービスとイコールではない。困っている個人を含めた環境、社会のありようを見つめ直すことが必要である。権利を享有できない状況に対する必要かつ適当な変更及び調整を行う。均衡を失した又は過度の負担を課さないもの（≠教育的配慮）でなければならない。このような内容が、障害者差別解消法による法的義務である。

また事前的改善措置については、合理的配慮の前に学内のルール、システムを整備、合意しておくことが望ましい。具体的には①機会の確保 ②情報公開 ③決定過程 ④教育方法等 ⑤支援体制 ⑥施設・設備について、ガイドラインの策定、学内規程、組織づくり→委員会、支援専門部門、紛争解決部門等を準備する必要がある。

最後に、大学における障害学生支援と障害者差別解消法—合理的配慮の7つの構成要素として①個々のニーズ ②社会的障壁の除去 ③非過重負担 ④本来業務不随 ⑤機会平等 ⑥本質変更不可 ⑦意向尊重がある。

森山准教授の報告は「ソーシャルワーク実習における障害学生支援の現状と課題」というテーマであった。

まず森山准教授の所属校では、実習までのクリア条件として、国家試験に伴う指定科目をすべて履修することを前提とする（演習、実習指導等で本人の様子を把握→コロナ禍により把握出来ず）。そして、実習前年までのGPAの基準を設けている。学生と相談して学生との相性を想定し最大限考慮して実習配属を決定することである。

実習中止の判断は、実習中に実習機関の業務に支障をきたさないことである。また実習

施設に対する配慮のお願いとして、①マルチタスクが苦手→1 回に 1 つの指示、②過集中、注意散漫→声かけを意識してもらう、③臨機応変が苦手→毎日同じスケジュール、前もってスケジュールの提示する、④独特の理解→すべての事柄・行動を指導者へ確認し、指示を受けて行動する、⑤休憩が取れない→とにかく一人になって休める場所・時間を確保する、⑥記録が書けない、時間を要す→記録が進まない学生は後日まとめて提出へ変更する。

## 社会福祉学科 FD 研修

タイトル：人文・社会科学系の研究倫理審査のご案内

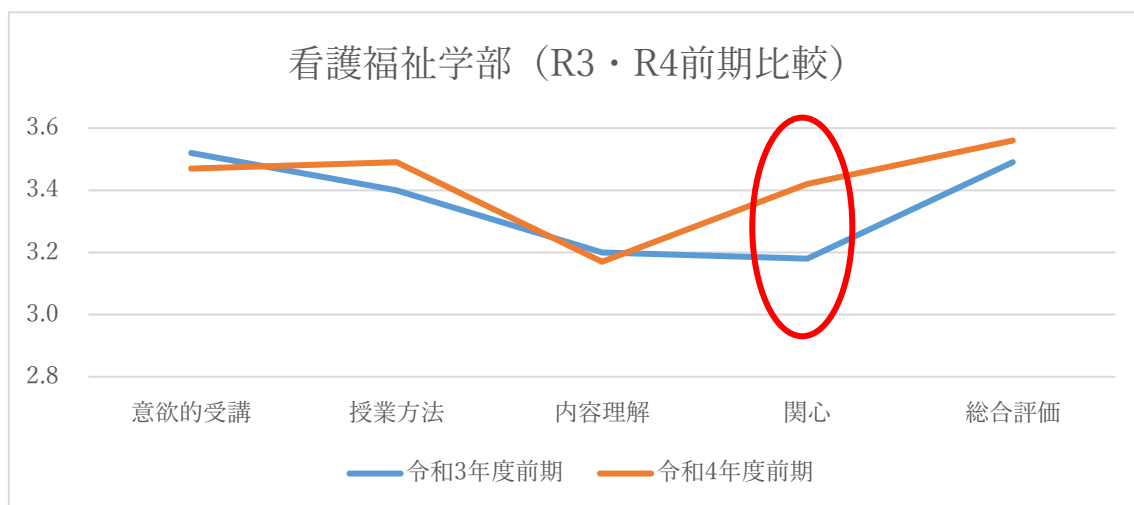
日時：3 月 30 日（木）13 時～ 社会福祉学科教員 11 名参加

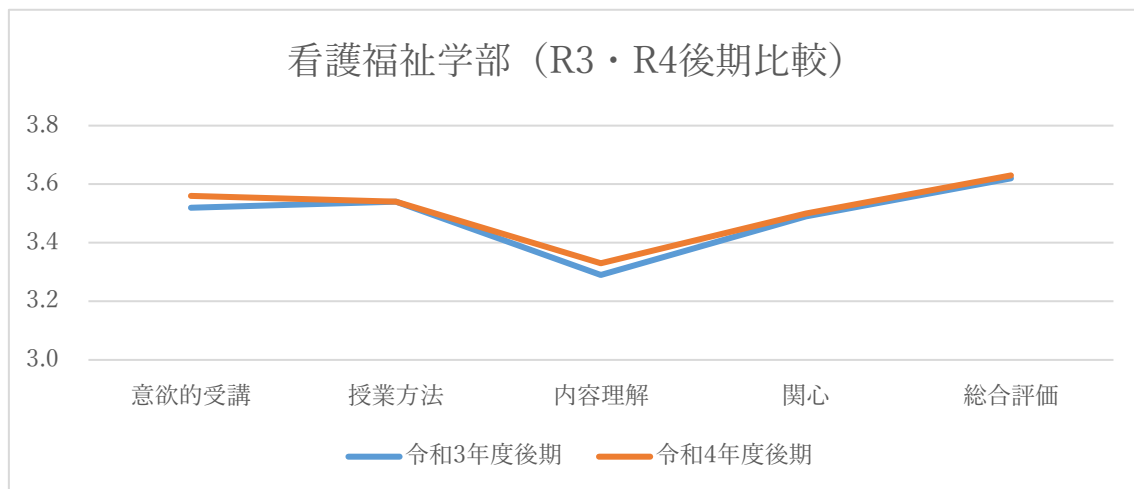
講義形式：Zoom によるオンライン形式

奥西教員（社会福祉学科）より、本学に人文・社会科学系の研究倫理審査会が立ち上げられた背景から開設までの経緯、「公立大学法人福井県立大学における人を対象とする研究倫理規程」や福井県立大学人を対象とする研究等における人権擁護・倫理委員会規程の説明があり、参考までに「倫理審査の必要な研究について（フローチャート）」の紹介があった。意見交換では、2023 年度から研究倫理審査会が立ち上がるため、この倫理規定がすべてではなく、この審査会を運用するなかで、一緒に必要な規定を検討していくことが確認された。また、本学の倫理審査が第三者から見ても適正な審査プロセスを経て判断されていると認識してもらうことが最も大切であるという意見があった。

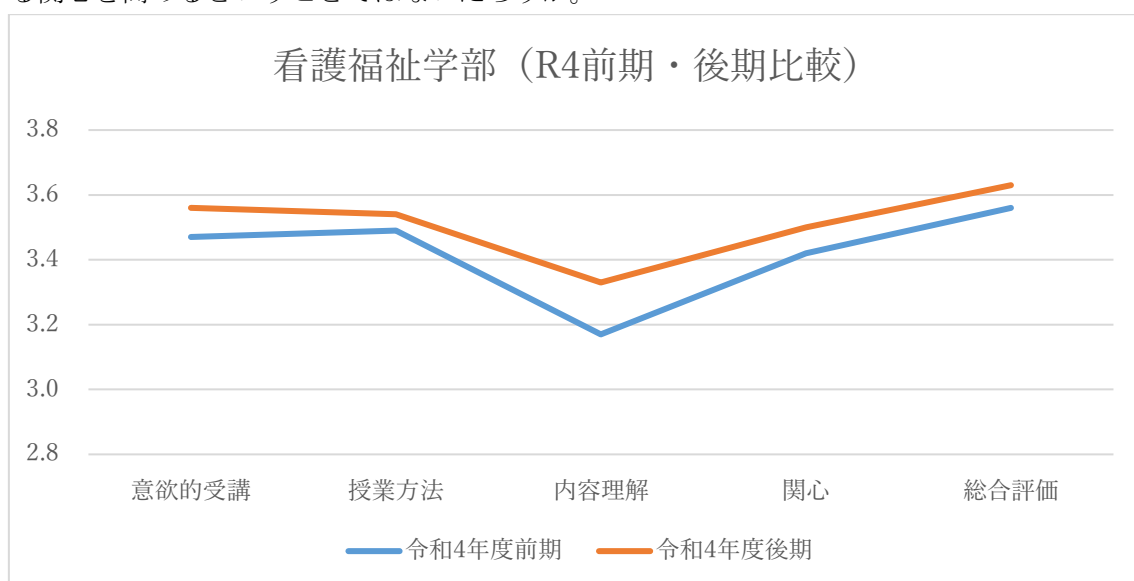
### 2.4.3 授業改善への取り組みと今後の課題と展望

看護福祉学部では、コロナウイルス感染拡大の影響を受けた 2020 年度、2021 年度に比べ、2022 年度の講義・演習の多くを対面で実施した。今年度の授業評価は、「対面」での授業の学生の主観的な教育効果が前年度のオンラインと対面を併用した授業とどのように変化したのかを見ていくことが重要である。これを通して、授業改善への取り組みおよび今後の課題と展望の示唆を与えてくれるのではないかと考えるからである。





実際に、今年度と前年度の授業評価を比較すると、まず後期に関しては、すべての項目においてほとんど差がなく、「意欲的受講」、「内容理解」の項目のみ、今年度 0.04 高くなっている。しかし、前期の比較を見ていくと、前年度に比べて今年度は、「意欲的受講」、「内容理解」が若干下がっているものの、「授業方法」、「関心」、「総合評価」は高くなっている。特に「関心」の項目に関しては、今年度前期と前年度前期では他の項目に比べて、大きな差があった（今年度は 0.24 高かった）。この一つの要因として、「対面」での講義の実施が考えられるのではないだろうか。前年度前期は、コロナ感染の状況に応じて、遠隔での授業を行うこともあり、対面での実施が望ましい場合でも、遠隔にせざるを得ない状況になっていたことも考えられる。そのことから、これはあくまでも授業評価からの推測ではあるが、オンラインで画面を通して実施する講義よりも、対面で実施する講義（言語的コミュニケーション・非言語的コミュニケーションも含め）がより学生の科目に対する関心を高めるということではないだろうか。



また今年度の授業評価全体に目を転じてみると、看護福祉学部の評価の特徴として前期に比べ、後期の授業評価の得点が相対的に高くなっている。これは回答者数の違いはあるものの昨年度に引き続き、同じ傾向となっている。これは看護福祉学部では、看護学科、社会福祉学科の両学科ともに4年間の学修を通して、専門職教育を行っているが、1年ごとに講義、演習、実習を連関させた教育を行っている。そう考えると、科目ごとに関心、内容理解等の差はあるものの、1年間の科目全体で見ると、それぞれの科目が連関しており、後期科目の授業評価が全体的に高くなっているのではないだろうか。こういった授業評価の結果からも看護福祉学部のカリキュラム編成や割当を学生の学びに合わせた適切な時期に開講していくための指標として考えていくこともできるのではないかな。

最後に、2023年度からは、社会福祉学科(2021年度より)・看護学科ともに新カリキュラムの科目が開講されることになる。学部教育では、時代の変化に応じた高度な専門職教育が求められている。それとともに、将来、それぞれの専門分野で働きだしてから社会から要請される専門的な知識や技術を学び続けることが求められてくるだろう。そう考えると、専門職教育は、それぞれの学科の目指す国家資格がゴールではなく、専門職になってからも学び続ける姿勢や態度を育成していくことが、つまり学生の主体的な学びを促していくことが最も重要なことではないだろうか。

そこで、本学部の教育で重視すべきは、学生が専門資格を取得することだけに終始するのではなく、「これからの時代を担う専門職としてどうあるべきか」ということを考えるような授業内容が必要である。これは様々な技術革新やICT・AI等が導入されるなかで、その時代に応じた専門的知識・技術が求められることは必然的なことであろう。そのなかで、学生には専門職として求められている知識や技術を「探求」し続け自己研さんすることのできる素養を専門職教育のなかで身に着ける取り組みが特に重要になってくる。

だからこそ、対面講義を中心としながら、演習科目等では職能団体との連携や専門機関から外部講師を派遣してもらうなどの他機関・施設との協働での取り組みを計画的に実施することが必要になってくる。これによって、学生は専門領域に対する「関心」を高め、また現場の専門職より生涯に渡って学び続ける姿勢や態度の必要性を教授してもらうことができる。このような授業展開を通して、学生の授業満足度を高めるとともに、その時代の人々の「健康」「生活」に寄り添い続けることのできる専門職をいかに育成していくかが、これからの本学部の教育の使命ではないだろうか。



## 2.5 学術教養センター

### 2.5.1 授業評価アンケートの結果

今年度の授業評価アンケートは、昨年度に引き続き WEB 上でのアンケートを実施した。また遠隔授業の負担が大きいことから、学術教養センターでは非常勤教員の担当科目については対象外とし、専任教員の担当科目のみを対象としてアンケートを実施した。

結果は、下記の図表に見られるように、学術教養センターでは、過去 11 年間に於いて、各項目で上昇傾向が続き、高い水準で推移している。これは、各教員の授業改善の努力の成果であろう。2022 年度の特に後期では 5 つすべての項目で過去最高数値となった。

2022 年度は基本的に対面授業であったが、一部の授業で遠隔または、対面と遠隔を同時に行うハイフレックス授業がおこなわれた。今年度、新しくつくられたアンケート項目である「遠隔システムの活用」（その授業で遠隔システムがうまく活用されていたかどうか）と「遠隔授業の効果」（遠隔で行われた授業について学習効果があったかどうか）においては、前期はそれぞれ 3.45（平均 3.40）と 3.37（平均 3.27）および後期はそれぞれ 3.61（平均 3.46）と 3.51（平均 3.38）となり、いずれの項目でも高い数値を出している。これは個々の教員の創意工夫の成果と考えることができる。

| 一般教育 | 2012 |      | 2013 |      | 2014 |      | 2015 |      | 2016 |      | 2017 |      | 2018 |      | 2019 |      | 2020 |      | 2021 |      | 2022 |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|      | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   | 前期   | 後期   |
| 意欲的  | 3.17 | 3.22 | 3.18 | 3.2  | 3.24 | 3.21 | 3.27 | 3.26 | 3.31 | 3.29 | 3.32 | 3.3  | 3.34 | 3.36 | 3.39 | 3.39 | 3.42 | 3.38 | 3.42 | 3.42 | 3.43 | 3.43 |
| 授業方法 | 3.3  | 3.38 | 3.28 | 3.31 | 3.31 | 3.34 | 3.4  | 3.39 | 3.4  | 3.41 | 3.43 | 3.45 | 3.48 | 3.48 | 3.49 | 3.48 | 3.53 | 3.51 | 3.52 | 3.52 | 3.51 | 3.56 |
| 内容理解 | 3.08 | 3.16 | 3.07 | 3.12 | 3.15 | 3.16 | 3.22 | 3.2  | 3.23 | 3.23 | 3.25 | 3.27 | 3.31 | 3.28 | 3.33 | 3.36 | 3.31 | 3.28 | 3.3  | 3.31 | 3.33 | 3.35 |
| 関心   | 3.11 | 3.24 | 3.11 | 3.18 | 3.17 | 3.18 | 3.23 | 3.23 | 3.27 | 3.24 | 3.25 | 3.28 | 3.29 | 3.28 | 3.33 | 3.33 | 3.34 | 3.3  | 3.33 | 3.34 | 3.31 | 3.38 |
| 総合評価 | 3.31 | 3.42 | 3.28 | 3.34 | 3.35 | 3.38 | 3.43 | 3.4  | 3.44 | 3.43 | 3.44 | 3.46 | 3.49 | 3.5  | 3.51 | 3.5  | 3.59 | 3.57 | 3.58 | 3.58 | 3.56 | 3.64 |

表 学術教養センターにおける 11 年間の授業評価アンケートの推移の表

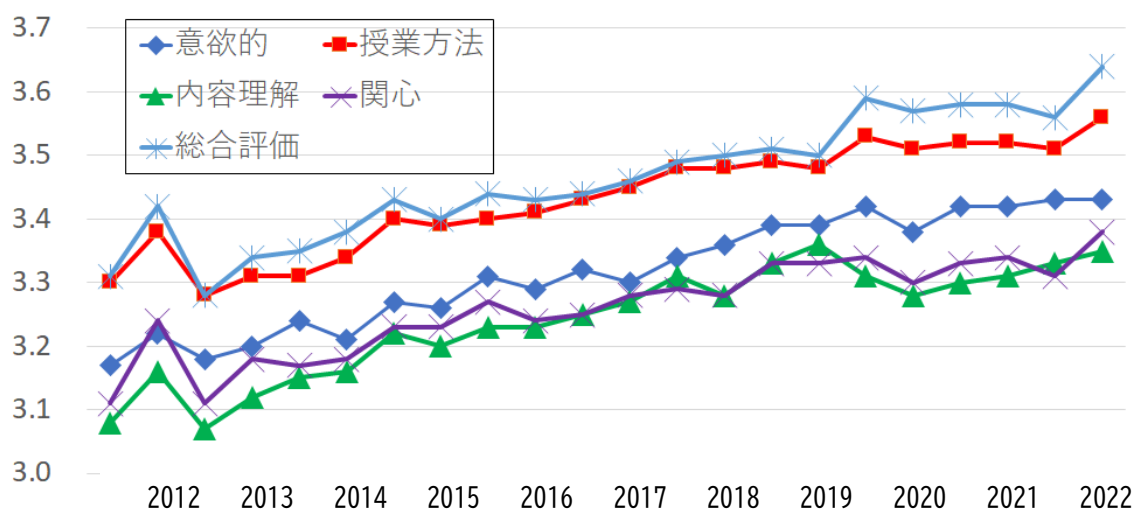


図 学術教養センターにおける 11 年間の授業評価アンケートの推移のグラフ

### 2.5.2 授業公開の方針と実績

学教センターでは、授業は常時公開となっており、教員同士の授業参観が随時行われている。  
2022 度は特に以下の学内公開授業と、オムニバス授業、授業参観が実施された。

#### (1) 学内公開授業

2022 年度は以下の 3 つの科目で学内公開授業をおこなった。

科目名：教師論

担当教員：國崎太恩

実施日：2022 年 7 月 15 日

内容：福井県立こども歴史文化館の館長をお招きし、学校と地域の連携について講演及び質疑応答をおこなった。

参加状況：受講生を含め学生と教職員をあわせて約 40 名が参加した。

科目名：西洋史

担当教員：松本涼

実施日：2023 年 1 月 19 日

内容：講義「ウクライナ戦争とドイツ」

参加状況：ハイフレックス形式で受講生 152 名、その他の学生、教職員若干名が参加した。

科目名：情報処理 A

担当教員：石丸香苗

実施日：2023 年 1 月 26 日

内容：最終課題の県内企業採用 PR 動画の公開上映会を行った。

参加状況：協力いただいた県内企業や商工会議所の方々、学内学生や教職員の方々を含めて 30 人以上が参加した。

#### (2) オムニバス授業

学術教養センターでは、2022 年度以下の 4 つのオムニバス授業が開講された。オムニバス授業では、教員が担当回以外も参観し、授業方法についての情報共有を行った。これは授業改善への関心を高めることが期待される。

科目名：教養特講 I（研究の世界）

担当教員：木村小夜、山川修、森英樹、清水聡、加藤まどか、渡邊浩一、熊谷正、黒田祐二、亀田勝見、田中武之、小松恭代、ロレイン・サッカ、島田洋一

受講生：149 人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

科目名：日本の文化と社会

担当教員：國崎太恩、杉村和彦、田中武之、石丸香苗、大石善隆、石原一成、北村知之、ジャレッド・デンマン、長岡亜生、加藤裕美

受講生：106 人

参加状況：5 月 30 日の授業では「学際的視点から」というテーマのもと、杉村、石丸、國崎の 3 名が登壇し、日本の文化と社会について議論をおこなった。その後の質疑応答では授業担当者以外の教員も加わり、学生も含めより学際的な視点から日本の文化と社会について議論をおこなった。また、それぞれの授業回においても数名の教員が相互に参観をおこなった。

科目名：比較文化論

担当教員：北村知之、ロレイン・サッカ、森英樹、加藤裕美、山川修、亀田勝見、石原一成、松本涼、石丸香苗、長岡亜生、杉村和彦、島田洋一、大石善隆

受講生：156 人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

科目名：現代人権論

担当教員：根田恵多、渡邊浩一、木村小夜、小松恭代、ジャレッド・デンマン、徳野淳子、黒田祐二、清水聡、加藤まどか、ほか

受講生：83 人

参加状況：数名の教員が相互参観した。

### (3) 授業参観

公開授業、オムニバス授業以外にも各教員が個別に授業参観を行い授業方法について情報共有を行った。

参観した教員：石丸香苗、松本涼、渡邊浩一

参観した授業：日本の文化と社会、西洋史、教養特講 I（研究の世界）、情報処理 A

学内公開授業、オムニバス授業、授業参観は互いの授業のやり方を学ぶことで、自分の授業の改善につなげる良い機会となったものと思われる。

### 2.5.3 FD研修

2022 年度は、授業方法の改善に関する以下のような講演会、シンポジウムに学術教養センターの各教員が参加した。

講演名：「第 3 期スポーツ基本計画に基づく東京オリ・パラ大会のスポーツ・レガシーの継承・発展について」

主催：公益社団法人 全国大学体育連合

開催日：2022 年 8 月 21 日

場所：オンライン

参加教員：石原一成

内容：スポーツ科学の授業に活用するため、東京オリ・パラ大会のスポーツ・レガシーの継承・発展について情報収集を行った。

パネルディスカッション名：「大体連研修会参加の経験とその後の活動への影響・コロナ禍の体育実技・今後の体育実技と大学体育指導者の育成について」

主催：公益社団法人 全国大学体育連合

開催日：2022 年 8 月 21 日

場所：オンライン

参加教員：石原一成

内容：体育実技の授業に活用するため、コロナ禍の体育実技・今後の体育実技と大学体育指導者の育成について情報収集を行った。

ワークショップ名：第 28 回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

大阪府立大学工業高等専門学校

開催日：2022 年 12 月 26 日～28 日

場所：オンライン

メンター：山川修

内容：ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップにメンターとして参加した。

フォーラム名：「第 11 回大学体育スポーツ研究フォーラム」

主催：公益社団法人全国大学体育連合九州支部

開催日：2023 年 3 月 13 日

場所：オンライン

参加教員：石原一成

内容：学生、大学、教員にとって魅力的な大学体育の再考などについて情報交換を行った。

#### 2.5.4 授業改善の取組みと今後の展望

2022 年度は授業改善について以下のような取り組みが行われた。

科目名：教育原理

担当教員：國崎大恩

授業改善の取組み：反転授業（授業前に学習内容を説明した動画を配信し、学生には内容理解に関する事前テストの受験をもとめ、授業では学習内容に関する質疑応答及び学生同士のディスカッションを通して内容理解を深める）を実施した。今年度実施した反転授業を評価・改善し、次年度も引き続き同授業科目において実施する。

科目名：心理学・人間関係論

担当教員：清水聡

授業改善の取組み：以前の板書しながら話を進める講義スタイルから、パワーポイントのスライドを配付資料とした授業にした。資料をもらったら安心してしまうのか、メモを取りながら受講する学生が 100%でなかった点が気になった。次年度は、メモを取りながら聴講することができるように配付資料に工夫を加えたい。

科目名：導入ゼミ

担当教員：木村小夜

授業改善の取組み：限られた授業回数の中で、ゆるやかな自己紹介から始め、連休中に担当する短篇小説を選択、ペアでの口頭発表と質疑（話す・聞く）・レポート作成方法の指導・作品に関するレポート作成（読む・書く）・フィードバックと自己点検へと収斂させて行った。課題はかなり多めで、そのつど教員側からの個別コメントも返したが、まずは学生同士での相互チェックが有効なようであった。

科目名：文学概論

担当教員：木村小夜

授業改善の取組み：本科目は遠隔対応を行っていなかったが、特別な事情により5月末より遠隔受講を申し出た学生に対し、一昨年度作成した音声を（ほぼ2回分ずつ）配信して対応、他の受講生と同様に課題も課し、毎回のフィードバックを個別に行うことが出来た。期末試験も、同部局教員の協力を得ることで別室受験が可能となった。2020年度以降作成された遠隔授業素材は、様々な事情を抱えた学生への比較的公平な対応を（結果的に）準備したことになる。

科目名：国文学史

担当教員：木村小夜

授業改善の取組み：概ねリアル Zoom 授業で実施。授業中、頻繁に軽い質問を投げかけると、対面授業時の指名発問よりもチャットによる反応の方がはるかに良く、授業内容に多くの受講者の言葉を盛り込めたため、興味を触発できたようである。課題を課さない回は授業中程で短歌の穴埋めクイズを行い、息抜きの時間を設けた。出された回答例は次回に紹介するが、ネット検索で正答を見つけることに意味はなく、その文字が入る理由説明を重視する旨を、最初に説明した。毎回の感想には全て個別にフィードバックした。他の講義科目同様、課題回答紹介と説明にかなり時間を割いた。

科目名：学術ゼミ

担当教員：木村小夜

授業改善の取組み：初回に受講者の1週間の都合を確認し、キャンパスを異にする2回生以上の受講者がゼミ室に一堂に集まれるよう開講曜日を移動させた。数回はハイブリッド授業とせざるを得なかったが、やはり内容に集中できない印象であった。キャンパス増に伴い、時間割の組み方はより配慮すべきものとなるだろう。

科目名：地理学・南米の社会と環境

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：大講義科目については、毎回の小テストとリフレクションシートを用いて能動的な思考を促す仕組みを今年も行った。また講義だけではなく、フィールドワーク、室内で取り組めるゲーム形式での学びやディスカッションなども取り入れている。これまでは全員へのリフレクションシートへのコメント返しを行っていたが、研究や学内業務とのバランスで今後は効率化が必要になって来ると思っている。

科目名：導入ゼミ・教養ゼミ・学術ゼミ

担当教員：石丸香苗

授業改善の取組み：ゼミ等の少人数科目では、グループワークやディスカッション、ディベート等を積極的に取り入れたほか、市議会議員とのトークや学生からの提案をテーマとして取り上げるなど、学生の好奇心を拾い上げるようにした。特に学術ゼミでは事前学習・フィールドワーク・体験の振り返りのセットを繰り返して学びを深める工夫をした。

科目名：導入ゼミ・教養ゼミ・学術ゼミ・哲学・倫理学・西洋思想

担当教員：渡邊浩一

授業改善の取組み：2022 年度は着任 2 年目で、学生の実状にあわせて各科目の内容・方法を調整することが改善の主眼となりました。その際、留意したのは、学生の自発性・創意が発揮されるような課題設定です。AI 技術の進展も著しい折から、今年度は人間の技能訓練・創意を意識した課題設定に注力したいと考えています。なおとくに後期は、この間の全般的な履修者数超過を受けて、できるだけ多くの学生を受け入れる形をとりました（倫理学、教養ゼミ）。こちらについては今後の展望は困難です。

科目名：神話学・西洋史

担当教員：松本涼

授業改善の取組み：授業の単調化や独善化を防ぐため、ゲストスピーカーを招聘した。神話学で 1 名（オンライン）、西洋史で 1 名（対面）。オンラインのゲスト招聘によって授業の幅を広げる試みを今後も続けていきたい。

科目名：中国語Ⅰ・中国語Ⅱ

担当教員：亀田勝見

授業改善の取組み：語学授業において、文法説明のためのスライドを増やし、視覚的情報を活用して理解できるようにした。

科目名：英語特論

担当教員：ジャレッド・デンマン

授業改善の取組み：実践的な場面を提供するため、オーストラリア在住の人とのオンライン交流会を 3 回開催し、履修生が用意したオーストラリア事情に関する質問のディスカッションを行った。オーストラリア側の参加者は、クイーンズランド大学・グリフィス大学の学生とクイーンズランド州の豪日協会の会員。現状、授業中に学生からの質問が少なく、オフィスアワーはほとんど利用されていない。しかし、試験結果からは授業内容を十分に理解できていない学生がいるため、今後オフィスアワーの活用をより促してみたい。オフィスアワーを気軽に利用しやすくするため、令和 5 年度はオンラインでの実施を試みる予定。

科目名：異文化理解

担当教員：ジャレッド・デンマン

授業改善の取組み：オールイングリッシュの授業を体験したい学生・英語力を伸ばしたい学生・英語はあまり得意ではないが、異文化理解を学びたい学生等、多様な学生のニーズに対応するた

め、日本語の教科書の使用や提出課題の言語が選べる仕組み等を採用した。現状、授業中に学生からの質問が少なく、オフィスアワーはほとんど利用されていない。しかし、試験結果からは授業内容を十分に理解できていない学生がいるため、今後オフィスアワーの活用をより促してみたい。オフィスアワーを気軽に利用しやすくするため、令和5年度はオンラインでの実施を試みる予定。

科目名：情報科学 I

担当教員：山川修

授業改善の取り組み：前半を反転授業形式で実施し、かつ、後半は対面で講義しながらオンラインにも配信し、それを録画して後からオンデマンドで閲覧できる、ハイフレックス形式で開講した。

科目名：情報処理 E

担当教員：山川修

授業改善の取り組み：この授業はDTP（デスクトップパブリッシング）を行うが、その過程で、写真のレタッチやイラスト作成を行い、それを課題として提出してもらっている。その課題を学生同士が閲覧できるようにし、良いと思う課題に関して学生同士でコメントをしてもらった。このことはコメントをもらう学生にははげみになり、コメントをする学生にはレタッチやイラスト作成方法の参考になる。

科目名：プログラミング D

担当教員：山川修

授業改善の取り組み：この授業はJavaを使ってゲームを作成するプログラミングの授業である。授業は、基本的にサンプルプログラムを動かし文法を学び、それを使って簡単な課題を解くという繰り返してプログラムを身に着けていく。そして課題は授業時間内に行い、わからないことはその時間内に教員に聞くことにより、次第にプログラミングのセンスを掴んでいけるように配慮している。2022年度は多くの学生が最終段階のもぐらたたきゲームの完成まで進んだ。

科目名：体育実技 I・体育実技 II

担当教員：石原一成

授業改善の取り組み：教員がウォーミングアップや練習方法を提示する学習活動から、学生主体の学習活動に発展させていくよう配慮している。具体的にはチームごとに設定したその日のリーダーを中心にウォーミングアップ、チーム練習、グループワーク等の学習活動を行い、リーダーシップ、フォロワーシップ、サポーターシップについて考え、実践する機会を提供している。毎回、受講生は学習活動の記録（自己評価、次週の課題、戦術、学び、感想など）を行い、教員がコメント・アドバイスを記入しフィードバックを行い、双方向授業の基礎づくりを行っている。

そのほかの取り組みとして、導入ゼミの授業改善のために、2021年度に行った指導内容に必要な条件の検討をもとに、2022年度はガイドラインを作成し、指導内容の標準化を図った。また、導入ゼミ教材の共有サイトをLMS上に作成し、知識や情報を参照できるような教材を集めて共有している。書籍の教材は、経済学部棟10階の事務室書架に配置し、担当教員がいつでも手に取れるようにしている。また、導入ゼミ関連教材は「大学での学び補助教材サイト」としてまとめ、教員

および学生が参照できるようにしている。

2022 年度は基本的に対面授業であったが、一部の授業で遠隔または、対面と遠隔を同時に行うハイフレックス授業がおこなわれた。それらの成果は、授業評価アンケートの数値からも読み取ることができる。授業評価アンケートは、学生からの数値であり、学生の力が客観的に伸びているかどうかを測るものではない。しかし、その数値からは個々の教員による授業改善が着実に進められていることを、読みとることができるだろう。

コロナ禍という不可避免の外圧は、教育のあり方を模索することを短期間で学ぶ機会を学術教養センターの各教員に与えた。2022 年度におこなわれた新しい試みの数々は、次年度以降にも生かせるものであろう。コロナ禍、ポストコロナに対応する方法論を構築するべく、工夫を重ねて、より良い授業の実施方法を模索していく必要がある。2022 年度の実践を糧に、新たな授業展開と教育につながるものと期待したい。引き続き学術教養センターでは、教育の質や改善について検討を重ね、より良い教育環境づくりに努めていく。



ファカルティ・ディベロップメント報告書2022

---

発行年月 2023 年 3 月

編集・発行 福井県立大学FD部会